



松本看板学講座

2020 講座版

私の看板物語

松本・松本都市圏編





昼も夜も看板ハンティング

私の看板物語



松本看板学会（旧・裏町看板学会）巡検の様子

『なんちゃって学会』のエセ学会長を拝命して早5年、開き直って先頭で旗を振り回していたところ、ついに出版物の前書きを飾るところまで来てしまいました。今回はこのような形で講座のアウトプットとして出版することが叶い、無茶振りに応えていただいた学会員の皆さまをはじめ、関わっていただいた皆さまに感謝申し上げます。

さて、ビジネス用語等でも一時もてはやされた『守破離』という言葉があります。日本古来の伝統の継承の仕方を表す言葉で、師からの教えや型を身につけ（守）、実践の中でアレンジを加え（破）、独立していく（離）という一連の流れを表しています。我らが松本看板学会は、松本市の景観講座として、『守』から『破』への移行を目指して発足しました。などと言えば、かなり格好良く聞こえますが、実際のところは、赤瀬川源平氏らが始めた型破りな学問『路上観察学』を手本に『破』を取り入れたというところから始まっています。『破』を気取りながら実は『守』というところが、いかにも『なんちゃって学会』らしいと思っています。

僕が勝手に提唱している『悪乗りのインプットと無茶振りのアウトプット』というスローガンが定着してきた中で、今年度はいよいよ出版というアウトプットまで漕ぎ着けることができました。これもまた、僕たち松本看板学会が微力ながら関わらせていただいる業界紙『signs』のコラムの書式をほぼ丸パクリという『守』の姿勢から生み出されたものでした。

初めての講座参加者もいる学会員の皆さんに向けていきなり取材・執筆を課題とする、今年度の無茶振りも中々のものでしたが、借り物ながらも『型』があり、それをオンラインで手軽に使える『型』として用意したところ、普段出版に関わりのない皆さんがそれぞれの限界を突破して、数多くの力作を作り上げてくれました。一昨年前の『看板健康診断書』に続き、課題における『型（テンプレート）』が持つ力を目の当たりにし、『型』+『無茶振り』によって文化系武闘派集団が着々と育ってきていることを実感しました。

コロナ禍対応の苦肉の策でもありましたが、デジタルツールやオンラインツールも、使い方次第でアウトプットへのハードルをぐっと下げられることも確認することができました。これで味をしめた学会員の方々が、次なる飛躍（破～離）に進んでもらえればしめたものです。今回のアウトプットは取材から完成まで三週間足らずという、過酷なスケジュールのもとで行われたものなので、内容や完成度という点では今一歩と思われるところもあるかもしれません。しかし逆に、素人でもたった三週間で、ここまでのものが作れるという点に注目していただきたいと思います。出来上がった記事と、裏学会長・倉澤さん作成の地図を並べると、今までにない松本のガイドブックの姿が現れてきました。今後も更に拡充していければと考えています。

想いやエネルギーが込められた看板は常に何らかのメッセージを発しています。見るだけでそれらを感じ取るのも看板の愛で方の一つではありますが、『signs』のコラムや今回の冊子作成を通し、もっと深く突っ込んでみることの大切さが分かりました。忖度や察すること等、スマートなコミュニケーションが重宝される時代ではありますが、ストレートに取材・対話してみると、看板を見るだけでは分からなかった、裏側に込められた本当の想いや、歴史・生活・文化・技術などを見つけることができます。また、何かと『けしからん』という形で圧力がかかり、自己表現をしづらい風潮の中でも、看板達は飄々と自己主張をしているように見えます。看板学会もそれにあやかり、良い加減に楽しみながらまちを眺めて行きたいと考えています。

今年度は新型コロナ禍という未曾有の出来事もありましたが、長年の景気停滞で元気を失いつつある街や、硬直化している街の景観など、逆境の中船出した当学会はヨットのように逆風を推進力に変えながら進んでいるように思えます。というのも、看板が放つ面白さや魅力が船底のキールのようにガッチリと、進む道を捉えてくれているからに違いありません。右に左に蛇行する様までヨットに似てしまっていますが、そんな松本看板学会の生き様を今後も生温かく見守っていただければ幸いです。

それでは、『私の看板物語』をお楽しみください。

2	ごあいさつ
4	私の看板物語 掲載看板マップ / signs「看板物語～長野県松本市」紹介

私の 看板物語・松本市街地編

6	私のお気に入り / サパンジ
8	セピア色のかなた / 高美書店
10	看板は物語の始まり / 器と工芸 なかつか
12	手作りを大切に /cafe SENRI 中町店
14	変わらない空気感 / かうひいや 3 番地
16	温故知新はここから始まる / 想雲堂
18	家族の看板物語 / ベラミ
20	錆びた鉄 / はなや和花
22	人と触れ合う / ニチカ
24	町会長は彫金師 / 鯛萬の井戸案内看板
26	昭和の香りを伝える / やきとり・炉ばた焼 田内屋
28	時代を越えるおもてなし / 和泉町伍蔵
30	逸れていく話、繋がる風景 / そればな

私の 看板物語・松本郊外編

32	あの看板は今 / 丸田公民館
----	----------------

私の 看板物語・松本都市圏編

34	ロマンチック街道の街 / 欧風な豊科の看板群
36	まち・駅・商店・看板 / 安曇野かわい
38	大きな木のある商店 / 猿田商店

40	「松本看板学講座」の歩み
42	松本の都市デザイン・景観を考える講座・ワークショップ等一覧
44	景観講座と空間整備の連携
46	看板学講座・松本の都市デザインへのメッセージ
47	講座運営チーム雑談コーナー・編集後記
48	あとがき

松本市街地編



上の地図内の●の数字は、市街地編の掲載順に対応、その側の黒い数字は、本誌ページ番号に対応しています。

上の地図内の◆のアルファベットは、右ページ「signs」の「看板物語～長野県松本市」の記事に対応しています。



松本郊外編（梓川）



松本都市圏編（安曇野市豊科）



松本都市圏編（安曇野市堀金）



上の地図の●の番号は、p.34～35内の写真の番号に対応しています。



2018年、日本サイン学会デザインフォーラムが松本で開催されたことをきっかけに、松本看板学会のメンバーが、signs誌上に「看板物語～長野県松本市」を連載する機会を頂いております。2020年の看板学講座では、このレイアウトを拝借し、参加者の皆様に「私の看板物語」を書いて頂くことになりました。



A4判3・9月発行 定価2,750円（10%税込）送料200円
お問い合わせ：一般社団法人日本屋外広告業団体連合会まで
E-mail info@nikkoren.or.jp



A 12号 布山金物店
四代目の手書き看板 / 高田美果



D 15号 陶片木
日々の暮らしの豊かさを届ける / 倉澤聡



B 13号 田立屋
金工職人が手掛けたもの / 小林一成



E 16号 開運堂
看板と書家・秋山白巖 / 高田美果



C 14号 しづか
手仕事を感ずる切り文字看板 / 長谷川繁幸



F 17号 松本看板学講座、そして、
一目惚れの女鳥羽そば / 天野由貴

◆のアルファベットは、左ページの地図に対応しています。

私のお気に入り

西堀通り

サパンジ・・・誰かに自慢したくなるパン屋さん

天野 由貴 | Amano Yuki
松本市教育部 / 生涯学習課・中央公民館

見逃してしまいそうな小さな看板のパン屋さん。

そこは、心温かい店主さんのこだわりの詰まった、絵本も読める特別な空間。

「知ってた？西堀通りに素敵なパン屋さんがあるんだよ」と、つい誰かに自慢したくなる。



松本に引っ越してきて間もない頃だった。まだ慣れない仕事帰りに、西堀通りをふらふらと歩いていたとき、ひっそりと灯りをともすパン屋を見つけた。黒板にチョークでかわいいイラストが描かれた看板からは、どこか懐かしさとあたたかさを感じ、惹かれるものがあつた。吸い込まれるように店内に入ると、ふわっと香ばしい香りに一気に包まれた。サパンジの看板商品は、ザクザク食感のデニッシュとハード系のパン。素材そのものの風味を感じられるパンが多い。どのパンにしようか悩んでいると、店主さんが「ハード系のパンは、冷凍しても美味しく食べられますよ」と、自宅でパンの美味しさを保つ方法を教えてくれた。店主さんの優しさに触れ、私はパンを抱えて温かい気持ちで帰宅した。

店主の白澤さんは松本出身。学生時代を過ごした京都で大手パン屋さんに務めていたが、「子育てしながらも店を持ちたい」という思いから、2014年に松本市でパン屋をOPEN。看板やお店の袋に描かれているデザインは、店主の白澤さんが大ファンだという陶芸家・種田ゆかさんによるものだ。ちょうどお店を開く頃に女の子がお生まれになったので、看板は女の子のキャラクターをモチーフにしたそう。店内には、娘さんが描いたかわいらしい絵のチラシが飾られていて、ほっこりと癒される。なお、黒板の看板にこのデザインを模写したのは、店主のお母さん。ところどころからご家族愛を感じることができる。

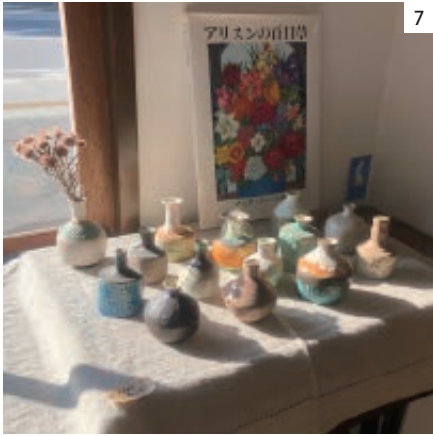
黒板のA看板の隣に、金属板にタイルを貼った看板がある。これは店主の手作り。金属板を使った看板を作りたいと考え、種田ゆかさんにタイルの制作を依頼したそう。金属錆びのこげ茶色とタイルの淡い青色が美しい。

ちなみにの店名「サパンジ」の由来は、「日常茶”パン”事」。ありふれた日常の中で、当たり前のようにこのパンを手にとってほしいという思いから、「日常茶飯時」の飯をパンにして名付けたそう。

サパンジの特徴は、パン屋さんなのに絵本が置いてあること。実はパンよりも絵本のほうが多い。(以前よりも絵本の面積が増えている気がする…。) この絵本は、必ずしも子どものためではないそう。絵本が好きだという店主の白澤さんは、「大人になってから読むと気付かされることも結構ある。パンは買わなくても絵本だけ見に来てください。」と笑っていた。



1. 外観。ついガラス戸を覗きたくなってしまう。
2. おすすめはデニッシュとハード系のパンと、絵本…！パン屋さんなのに、パンよりもたくさんの絵本がずらり。
3. 「パン」と書き添えられているのがおもしろい。
4. 看板は店主の手作り。タイルは陶芸家・種田ゆかさんに依頼し制作したものだそう。
5. 娘さんの手作りのチラシを発見。「見つけてくれてうれしいです」とはにかむ白澤さん。



6. 店主の白澤さん。「パンを作りながらで良ければ…」と取材に応じてくださった。手際よく生地には餡を包んだり、焼きあがったパンを取り出したりと、本当にお忙し中、親切丁寧にご対応いただきました。
7. 看板を手がけた陶芸家・種田ゆかさんの作品である一輪挿し。種田さんのファンだという店主の熱が伝わる。
8. 袋にも看板のデザイン。思わず「袋ください」と言ってしまう。



天野由貴（あまの・ゆき）



群馬県出身。2019年に松本市に移住。群馬県で公民館主事の経験を経て、現在は松本市中央公民館社会教育推進担当に所属。看板学講座の担当になって2年目。好きな看板のタイプは、A看板と、シルエットを模った看板。

セピア色のかなた 本町（伊勢町通り）

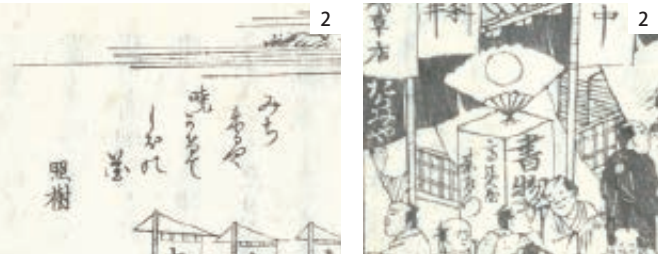
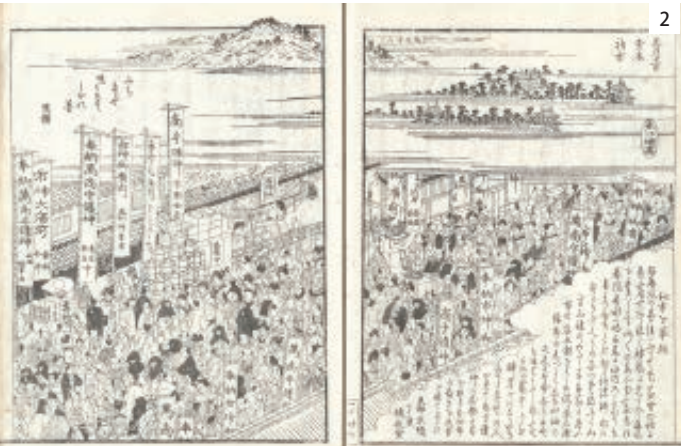
高美屋甚左衛門から引き継がれてきた伝統の高美書店

田川 温 | Tagawa Yutaka
主夫／旅人

国宝開智学校、重文旧制松本高等学校など存在する松本駅前には「学都・岳都・楽都」のモニュメントがある学都松本。かつて松本の学生に愛されたいくつもの書店、古書店があった。そんな書店のひとつ高美書店を訪ねた。伊勢町通りに面して松本パルコの東側にあった。



1. 高美書店：「善光寺道名所図会」にも掲載されている高美書店は高美屋甚左衛門が寛政九年（1797 年）に創業した松本でも最も古い本屋の一つである。現在は伊勢町通りに面しているが二十数年前までは本町通りに面して凡そ二百年間商いをしてきた江戸時代の蔵が松本パルコ側に引き出されて古書店慶林堂として現在も活用されている。慶林堂は 2001 年松本市景観賞を受賞している。



2. 図には松本の初市の模様と初代甚左衛門の句「みちくるや 暁かけて しほの花」も掲載されている。

図版出典：善光寺道名所図会（一ノ廿七）／嘉永 2(1849) 年出版
NPO 長野県図書館等協働機構 信州地域史料アーカイブより
県立長野図書館所蔵

当時の木製の看板がある。店名以外作成時期が昭和甲戌（きのえいぬ）初秋＝昭和 9 年秋に山形県酒田出身の書家で国定教科書書き方手本の筆者であり、日本書道研究会初代会長。山口半峯が揮毫している。看板に半峯居士とあるが、佛籍につくのは五年後であり、家にいて士官せず修行を行う読書人と辞書にはある。現在の看板は当時より一回り以上削り落とし重さもあったのでかなり薄くしている。当時高美書店は国定教科書の取扱店であり、その縁で引き受けたのではと 7 代目店主の高美正浩氏は微笑む。当時は結構繁盛していたと思われる。蔵の 2 階には昔の他の看板が大切に保管されていた。数軒隣の看板が秋山白巖の書であり、昔の松本商人を彷彿させる。「善光寺道名所図会」の初市に掲載されている場所で、アルプス風の吹く厳しい寒さの中、冬の行事の一つあめ市が行われる。本



3. 慶林堂の看板が掛かる江戸時代の蔵

町、中町、伊勢町など各所でダルマや福あめの露店が立ち並び歩行者天国となる。特に牛つなぎ石を中心に甲州軍と越後軍による塩取り合戦なる綱引きや七福神による塩のふるまいなどがある。毎年かなりの人出となる。

筆者のあめ市は毎年本町伊勢町界隈に深志神社の市神社から遷座した市神様をお参りしお礼を頂く、その後露店で小さな飴袋を一つ購入していた。家に帰りお礼を神棚に飴を母へ渡していたが、母は最近他界した。母は商家の出のため神棚を大事にしていた。



4. 昭和 9 年秋の看板



5. 板のサイズを小さくした現在の看板



6. 七代目店主の高美正浩さん



松本の街にはところどころになまこ壁の建物を見かける。近代的な建物の中にもポツンポツンと存在する。これは城下町を想像するが松本は何度も大火にみまわれ主は明治以降に作られてきた。田舎育ちの私にとって蔵はよく見かけてきたが街中の蔵は白化粧されている。土壁の蔵、否土蔵であった。今回取材した高美書店の蔵を活用した慶林堂が今閉店していると聞く。古書は価格が難しいと店主の高美氏は言う。最近松本の青翰堂書店が閉めて私が利用していた書店古書店が減ってきた。残念な話だ。慶林堂の復活を願いたい。今時の建物より安定感がある。高美書店は初代からの出版を今も続けていることに感銘する。「松

本のあめ市」「一九が町にやってきた一江戸時代松本の町人文化」「信州の本屋と出版」などなど出している。これが本に携わる伝統なのだろう。いつまでも残って欲しいものだ。

田川温（たがわ・ゆたか）



食品メーカー勤務時代、仕事と趣味で日本全国食べ歩き退職後、後遺症で現在通院中

看板は物語の始まり

中町通り

器と工芸 なかつか・・・現代的でありながらも、界限に溶け込む看板

今井 麻美子 | Imai Mamiko
Pottery of animal 動物陶器つくり手

ノスタルジックな雰囲気に加え、どこか現代的なオシャレさがある中町通り。旧善光寺街道沿いにあり、江戸時代には酒造業や呉服などの問屋が集まり繁盛してきた商人街。

大火や水害など度々災害に見舞われながら、何度も立ち上がってきた歴史をもつ。その歴史の中で、先人たちが知恵を出し「なまこ壁の土蔵」造りの建物が建てられるようになった。今なお残るその建物が、この界限の1つの看板となっている。

この通りに2020年7月17日「器と工芸 なかつか」の看板が加わった。



1. 看板（タイトル）から
お店（物語）への入口

現代的でありながらも、界限に溶け込むように「器と工芸 なかつか」の看板はある。中町通りが持つ雰囲気合うような、シックでモダンな看板にしたかったと店主。

店主は錦織康子さん。東京で会社勤めをされた後、専業主婦となり、お子さんが手を離れ出した頃に家庭と両立しながら介護の仕事に就き、約19年介護の仕事をされた。そういった日々の生活の中で培われてきた経験や知識が、自然とこのお店の開業へとつながっている。

「30代、40代は子育てがありましたし、50代にはいってくと母の介護も始まりました。なにかをやるのは、どう考えても今しかなかったから。」そして「今の年齢でなければ、こういうお店にはならなかった。今までの人生の中で培ってきたものが、自分の中で貯金になったんだと思う。」と語る。

お店を開くきっかけは、子育ても介護もひと段落した頃に訪れる。同世代であり、親友のような存在の店主が営むカフェ。カフェの

常連客の1人が骨董を扱う方だった。

お店での何気ない会話の中で、古い器が倉庫で埃をかぶって眠っていることや、生活に取り入れるような形では売り買いされていないことを聞き「もったいない!」と思った錦織さん。古い器をきれいにして、素敵にディスプレイすれば良いのではないかと冗談半端で言った、ご自身の言葉がきっかけとなった。

元々、自身のお母さまが骨董好きで、日用品として古い器などを取り入れていた店主。日用品を見渡せば、現代作家の手作りの品も。実家が所有するビルの3階がしばらく空き店舗になっていたことも重なる。

生まれ育った場所で商売を始めるので、近所の方へも分かりやすいように。また、この場所を残してくれた先祖への感謝の気持ちも込め、店名は、旧姓の「なかつか」をつけた。

古い器を日用品として取り入れる提案をする為、仕入れた物を綺麗にしてから店頭に並べたかった店主。考えた末に、新しい物を



2. 古い器と現代の作家物を漆のお盆へ
せて、生活への取り入れ方を提案。漆
の器やお盆などは、同級生が営んでい
る同じ中町通りにある老舗、伊原漆器
専門店の提供



3. 店内の香りは、開店祝いに娘さん
からプレゼントされたイタリアの
ディフューザー。イタリアへ行っ
た際、文化や成熟した大人が生き
生きとしている姿に感銘した店主
だからこそのプレゼント



4. 店内からは、器を眺めながら、中町通りの
様子も見える



5. 「器と工芸 なかつか」のロゴマークとショッ
プカードを制作されたのは、安曇野市穂高にあるギャ
ラリー「十方（ジッポウ）」も運営するデザイン会
社アズグラフ。Nは「なかつか」のN。赤い部分は、
ひらがなの「な」を落款であらわしている。店主
の第一印象もデザインに影響しているそう



動物陶器
つくり手

第4回の看板学講座より参加。まちあるき
が好き、デザインが好き、写真が好き。今
回「器と工芸 なかつか」さんで縁がつな
がって、看板へ掲示する写真を撮影をさせ
ていただきました。
今回の取材で、看板を通じて人の想いが重
なっていく始まりを知ることができ、看板
の新たな魅力を発見することができました。

8割、古い物を2割ぐらいの品そろえとした。「介護の仕事もお店の開店も、気楽に始めたのよ。」と謙遜されていたが、落ち着いた物腰と立ち振る舞いからは想像できない”大胆な決断力”と”芯の強さ”が全ての答えのような気がした。

看板の中にも、その大胆な決断はあらわれる。器と工芸を扱うなら、はっきり謳おう。3階だから、どういうお店かも伝えよう。そして、ロゴ。デザイナーの方たちに何案か提示していただいた中で1番”バン”とした印象の強いロゴを選んだ。ロゴを直観で決めた時は、デザイナーの方たちがロゴに込めた想いを知らなかったそう。ロゴのコンセプトが「Modern&Bold」”Bold”は”大胆、勇敢”店主の背中を押すために、デザイナーの方たちが想いを託した一言。店主は知らずに想いを受け止めていたのかもしれない。

そんな想いが詰まった看板を目印に、3階と記された暖簾をくぐると階段が続く。初めてお店を訪れた時、一段、一段、階段を昇

る際にドキドキしたのを思い出す。どんな器と工芸があるのか。どんな店内なのか。どんな人が店主なのか。そんな、階段をのぼる人の思いを汲み取るように階段の途中に飾られた器と花。更にあがると、道案内のように再び看板があらわれる。横から差し込む窓からの光を合図にお店の扉へと誘う。

本好きの店主は、本のページをめくるような”ワクワク、ドキドキ”になるように看板（タイトル）からお店（物語）の序章をデザイナーの方たちと相談しながら考えた。

看板から始まる物語の中で見られる、中町通りの町並みが、店主が提案する日用品としての骨董と、現代作家の手仕事と並べられたお盆の中で、美しく並んでいた。そこにある古い物と新しい物のノスタルジックな雰囲気と現代的なオシャレさが中町通りと重なって、生まれ出るものと受け継がれるものの良さを、私たちへ伝えてくれているのかもしれない。

手作りを大切に 中町通り

cafe SENRI 中町店・・・街並みと調和したおしゃれカフェ

鳥羽 水美 | Toba Minami
松本市都市政策課都市デザイン担当

中町を歩いていたら、木を使ったとってもおしゃれなお店を見つけた。入り口のガラスにはポップなソフトクリームの絵にローマ字で SENRI と書かれた行燈。周囲の建物と不思議になじんでいるのはなぜだろう・・・。そう思って私はお店の絵扉をくぐった。



松本を食べ歩きのマチにしたくて

中町に店舗を構える cafeSENRI（茜里）は、軽井沢にあった伝説的なソフトクリームの店「みのりや」の正規代理店だ。木を基調とした外観に、ポップなソフトクリームの絵が目を引く。

cafeSENRI は道の駅小坂田公園にも店舗を構え、崖の湯温泉薬師平菫宿のオーナー山村さんが経営している。お話をお聞きすると、お店は「手作り」をコンセプトに、外観・内装は仲間と作ったという。

「この建物は、なまこ壁を使ったものじゃないので、どうしても中町の雰囲気、近代的なものがきいてしまうんですね。でも、松本ってクラフトの街じゃないですか、中町も蔵とクラフトの街みたいな雰囲気があるので、古材を使って、クラフトのイメージを出しました」

「なまこ壁の建物であれば、街の雰囲気と調和させるのは簡単だったが、建物が独立していないため自分の部分だけなまこ壁にするのは難しかった」そう。お店の上部がトタンのため、和の雰囲気にも向かなかったという。

看板についてのこだわりを聞くと、「手作りで自分たちにしか出せない味を出そうと思ってやっているの、観光地によくありがちな写真の看板を付けるよりは、手書きの看板にしようと思った」と話してくれた。目を引くソフトクリームのウィンドウサインは、チョークボーイというアーティストが描いた。「チョークアートをやっている人が知り合いにいたので、思い切って”ソフトクリームのお店だよ”って分かるように描いてくれないかと言って、ソフトクリームをでかくガラス1枚に描いてもらったんです。行燈、昔の石の瓦に書いてある絵も全て描いてもらいました」

入り口のすぐ脇の看板には、「ジョンレノンも愛した」「伝説のソフトクリーム再び！」という文字と、ジョンレノンがアイスクリームを食べているイラストが石の瓦に描かれている。「おいしいソフトクリームで、ストーリーがあって、どこでも食べれるものじゃないものがやりたかった」。自慢のソフトクリームが、お客によく伝わる看板だ。ソフトクリームが描かれた行燈が、ポップでありながら中町の雰囲気にもマッチしている。

「古材を使っているお店は、中町であまり見かけないと思うんです。だから、この部分が街にフィットしてないただ浮いてしまう。白のチョークで手書きしたり、行燈に関しては中町の雰囲気にあわせて付けました」

中町にお店を出した経緯を伺うと、「観光業（旅館）をやっていたので、縁あって松本にお店を構えることになったんですけど、

このまちを”食べ歩きのマチ”にしたい」と話してくれた。そこで、テイクアウトの窓を作り、ソフトクリームをメインとした軽食を展開したという。「当時は食べ歩きのお店が少なく、いろんなところに気軽によれるようなお店を作りたかった」と語る。

ちなみに、中町に2号店をオープンするそうだ。そこでは、ビーガンを中心にしたメニューを提供する。ビーガンとは、動物性食品をいっさい口にしない「完全菜食主義者」のことだ。

「ビーガンは偏った考えじゃなくて、1週間に1回だけでも、自分のために、地球のために、健康な食事を楽しみませんか？という意味もこめた」という。新しいお店では、どのような看板で、どう街と調和させるのだろうか。今からそちらも楽しみだ。



1. 古材をふんだんに使った外観と看板
ガラスに書かれているソフトクリームを白のチョークで手書きしたのが店主のこだわり。
2. 中町っぽい行燈
中町の雰囲気を感じさせる行燈だが、ローマ字で SENRI と書かれていたり、ソフトクリームの絵が描かれていたりなど、おしゃれなデザイン
3. 入り口の看板たち
白のチョークで手描きした看板。 石の瓦の小さな看板が3枚縦に並んでいる。一番下の看板はジョンレノンがソフトクリームを食べている絵だ。この絵を描いたチョークボーイというアーティストは、東京を拠点に活動している。今季、チョークボーイ率いる”手
4. ロイヤルスウィートバナナ
お店の看板商品。ジョン・レノンも愛したという伝説のソフトクリーム。
5. アイスオムレツ (チョコバナナ)
ロイヤルスウィートバナナの入ったオムレツ。アイスに合うようにメニューを開発しており、生地がモチモチ。
6. 店内の様子

鳥羽 水美（とば・みなみ）

2020年松本市役所に入庁。都市政策課都市デザイン担当に配属となり、松本看板学講座に参加する。

安曇野市の生まれ。水郷の里にちなみ、父に水美と名付けられる。ピアノが好き。音楽が好き。学生時代は吹奏楽部に所属していた。自画像は高専時代のファゴットを吹いている絵。ほとんどの人から「ファゴット??」と言われるのが悲しい。木管楽器。オーケストラなどで探してみたい。マイ楽器が欲しいが車ぐらい高くて手が出ない。

珈琲と甘いものとお酒が好き。最近は近所の温泉に行ってリラックスするのが楽しい。

変わらない空気感

小池町

かうひいや3番地・・・JAZZ が流れる懐かしい空間

山田 達也 | Yamada Tatsuya
松本市都市政策課都市デザイン担当

吉祥寺、鎌倉と店舗がかわっても 30 年間受け継がれている変わらない空気感。
まるで昔から松本にあったかのようにまちに溶け込んでいる。



変わらぬ佇まい

かうひいや3番地は松本城下町において商人・職人の町であった小池町に位置する。
これまで区画整理事業などが行われなかったこともあり、現在でも江戸時代からの町割の面影が残った建物が見られるが、近年の経済状況の変動により、企業が撤退した空き地が駐車場になり、後に高層建築物が建設されるなど環境の変化が目立つ場所でもある。その中で変わらぬ佇まいを保ち続けているのがかうひいや3番地である。店内からはジャズが流れ、窓の隙間からは暖かい光が道路を照らしている。この場所だけはまるで時が切り取られたような不思議な空間である。

受け継がれる空気感

かつては染物屋であった築 100 年以上の建物をリノベーションし 2017 年に松本でオープンした。これまで、東京・吉祥寺や鎌倉など場所を変えながら 35 年以上営業し松本に行きついたのでそう。家具や看板は店舗が変わっても同じものを使い続けていて、お店の空気感は今でも変わらず受け継がれている。がらがらと扉を開けて玄関を開けると「くつのままでお上がりください」と書かれた看板が設置されており、土足のまま中へ入るスタイルも同じく受け継がれているようだ。店内は昭和を思わせるレコードや家具が並び、店内ではジャズがながれ、懐かしい雰囲気醸し出している。中でも Shinger のミシン台の足を利用し厚い天板をと

りつけたテーブルには、細部までこだわりを感じる。

フィーリングを大切に

看板の木材は雑貨を収集する趣味があった祖父から譲り受けたもの。味のある字体は、あまり字がうまくないが、どこか味わいのある字を書く友人に依頼し、デザインは書く人の面白みが現れるように自由に書いてもらった。と店主の安藤さんは語る。店名の由来はシンプルでわかり易く「かうひいや」という名前は当初からきめていたが、コーヒー屋は全国にいくつもあることから、当時吉祥寺で営業していた際に店舗の地番であり好きな数字でもある3番地を当時から採用し、今も使っているのだそう。今の住所には3はないが店舗名は変えることはなく、場所が変わっても変わらないこだわりが伝わってくる。メニューはコーヒーとケーキのみ。リキュールの効いたケーキは店主の手作り。大人の味わいが楽しめる。
店内は隣の席と程よい空間が保たれており、心地よいジャズミュージックが流れ、他を気にすることなく自分だけの空間が楽しめる。東京から馴染みの客が来ることもあるようで、空気感が同じというほど、場所が変わっても店のスタイルは変わらず、落ち着いた空間に心が安らぐ。

1. シンプルな佇まいの建物から溢れる暖かい光やジャズが懐かしさを感じさせる。
2. 味わいのある丸みを帯びた文字の看板が並ぶ。材質が木で統一された看板たちは建物と一体となった空間を形成している。
3. 扉を開けると最初に出迎えてくれる看板。テーブルの一部を活用して看板としている。
4. 統一された色彩の家具が立ち並ぶ。カウンターの狭い隙間からはかろうじて店主の気配を感じることができる程度の距離感。
5. ジャズが広がる空間。リクエストにも答えてくれるらしい。
6. 広く奥行がある店内。席数は少なめで、程よい距離感が保たれている。

山田 達也（やまだ・たつや）



2014 年松本市役所に入庁。2020 年より都市政策課都市デザイン担当に配属。同年、屋外広告物の審査担当となり 250 件以上の広告物を審査。同年より松本看板学会に参加し、身近な看板の魅力に引き込まれる。



温故知新はここから始まる

上土町

想雲堂・・・店主自ら彫った木彫り看板

田邊 ひろみ | Tanabe Hiromi

古本喫茶、夜な夜な Pub、時々寡黙なマスターとにっこり、きっぱりが素敵なパートナー
お二人の魅力に溢れた古本喫茶、
遠くからでもこの光が見えるとほっと心が緩んできます。



看板を彫るにあたって、マスターは、まず材木屋に行き、木を選び、彫刻刀で彫ったそうである。木が思ったより硬く苦勞の挙句、Open 時には雲の字が出来ていなかったそう。

マスターの前身は広告代理店勤務、営業職であったとお聞きした。営業は自由な時間があって悪くはなかったと仰る。

白雲なびく駿河台という校歌の大学で歴史学科；考古学・民族学を修めたマスター、柳田国男学派という Nipponia Nippon のような学問で私には興味津々である。

因みに この校歌は、数ある校歌の中でも屈指の大学校歌らしい歌として知られ、世の多くの人々に親しまれている。こうなるともう国民の貴重な共有財産であると書かれている。

歴史学科とは何ぞや？と問うたら古文書から歴史を解く。
考古学は？モノを調べ物証によって古いモノを明らかにする文字のない時代を扱う というお答えを頂いた。

まったくもって知識に欠ける私は平伏するしかないのである。

ここに店を出そうと思ったきっかけをお聞きました。

昼夜の境界線を探していた、裏町まで行くと完全な夜の街になってしまうので、その境界線がこの辺りかと…場末感が良いと思っていて、ここがギリギリの場末と思った、古い建物がよいと思っていたし、この建物を見た時 - 面白いと思った - そうです
どのような店にするかの構想、準備に 1 年かけ 2013 年 6 月 15 日に開店、今年 8 年目となります。



実はこの建物は松本で一番古い鉄筋作り、以前は何軒かの店が 2 階にあり、中には、ミラーボールの回る店、今を先取りしたジェンダーフリーの店もあったそう。私はこの店が古い建物だった頃、時々眺めて何だか面白い建物だなあと考えていた、中でへえ〜つくしよ！と噓をしたらバツタリ倒れそうな位に見えたけれど とんでもなかった 築 100 年の松本で最初の民間鉄筋作りの建物なのだった。

1. パートナーの笑顔が想雲堂のもう一つの顔
彼女は関西生まれ、大学入学で信州へ
卒業後は添乗員として日本のあちこちを回ったらしい
マスターにそっとお聞きしたら、知り合ったのは-鯛焼き屋の夜の部 Bar- であったとか



2. マスター・渡辺宏さん



3. 想雲堂にはフクロウがいる
これを最初に見た時、とても素敵と思った
マスターの好みかパートナーの好みか…
想雲堂は古本屋である
それが見て取れる
ところ狭しと並ぶ積み上がる本！
店の三方は本の壁である



4. 想雲堂の夜は、マスターが選んだお酒を楽しむ Bar になる
スコッチ・アイリッシュ・日本のウィスキー・クラフトジンも並ぶ棚と焼酎、カクテルもオーダーできる
あては珍しい牡蠣の薫製や沖縄諸島の黒糖等々、陽が落ちてからの楽しみもある古本屋、それが想雲堂である



5. ベンチのここは、勝手にお二人席と呼んでいる、時々仲良く語らっている二人を見ると嬉しくなる。毎年クリスマスが近づくと息子の匠君がキリストの降誕を毎日作って並べてくれる
私はそれを楽しみにしている

田邊ひろみ（たなべ・ひろみ）



引越し回数は両手に余る。終の栖になるか…松本！！
お仕事は？と尋ねられるとニッコリ笑って（ここが大事）
"やぐざ稼業をしております"と答えることにしている
好奇心と探究心に、ナマケ心を加えると私になる！！と
近頃気付いた…遅いッ！

家族の看板物語

大橋通り

ベラミ・・・松本の郷土人形文化を伝える

三村 修子 | Mimura Shuko
人形制作

自動車で大橋通りを松本駅方面に行くと数回に一回は信号待ちでこの店の前に停車するのだが、いったい何屋なのかがよくわからないとよく言われる。はたしてその経緯を尋ねてみると、人形に囲まれて育った二十歳そこそこの義母が不安と期待を胸に始めた店が、今となっては私の夫であるところの彼女の息子が松本の人形文化を次世代に伝えようと仕事をしているようだ。



看板から店の変遷をたどる

ベラミは松本で古くから親しまれている松本押絵雛や七夕人形等を製造販売する店である。信州大学方面から松本駅方面に向かう国道 143 号線、通称大橋通り沿いにこの店はある。自動車の交通量が多く歩行者は少ない。信号待ちをする自動車の車窓からは店がよく見えるので、初めて店に来るお客様の中には「車からよく見ていたが、何屋さんかわからなかった。」とのこと、看板が役立っていないのが泣ける。

もう一つよく聞かれるのは「ベラミ」の意味。昭和 25 年頃、東京さくら会で黒岡百合子先生に師事していた私の義母、三村 (旧姓猿田) 和子がそれまで本町の実家で開いていた人形教室から独り立ちして高砂町で人形教室とアクセサリー店を始めるにあたり、当時母の実家によく来ていた服飾デザイナーの君島一郎さん

に店名の相談をしたところ「メモにフランス語と思しきカタカナ名の候補をたくさん書いて下さり、ベラミが一番短くて覚えやすかった」。仏語で Belle Amie (ベラミ) とは英語で Beautiful Friend の意味。節句人形や市松人形など昔から子供と共にあった人形達のことを友人と表現したものであろう。当時の店は残念ながら記録に残っていないが、唯一残っている高砂町時代に作ったと思われるマッチ箱。この時の店名のロゴは筆字を模している。

その後彫金家であった義父三村隆重と義母和子が結婚し子供も生まれ手狭になった為、大橋通りに今の店舗兼新居を構える。この頃はまだ和子がおもだってフランス人形や日本人形などを製作しながら、人形教室をしていた。新築から数年後、大勢の観衆が待ち構えるなか東京オリンピックの聖火ランナーが大橋通りを走っ



1. 古い押絵雛や七夕人形等が展示してある店内

てくる場面。看板をよく見ると店名のロゴは角が蕨手文様で、クルッと巻いたおしゃれ調になっている。制作者は不明。

結婚後隆重は和子との人形制作の傍ら東京の押絵羽子板職人永井周山先生の指導を受け、数年かけてその技術を習得し作品展示会では自作の押絵羽子板を発表していた。これを見た何人もの松本の人々に松本押絵の復活をすすめられ古い松本押絵の蒐集と修理を始め、教室の生徒さんと「松本押絵雛研究会」等を立ち上げ、制作方法などの研究を深めた (揮毫は祖母、猿田晴風、昭和 54 年とある)

しばらくして取扱商品は松本押絵雛など和風のもが増え始め、作った看板は木と白いプラスチックを貼ったのち字を切り抜いて板に貼り付けたもの。金属製の枠に下げて店前に置いてあったが、これは今は使っていない。この頃から現在に至るまでベラミのロゴはリボン調を継続している。制作者は不明。また、それまでであった袖看板 (記録無し) が宅配便の配送時に壊れてしまった為、木にベラミとだけ彫り着色してある袖看板も前出の看板とほぼ同時期に作られたと思われる。

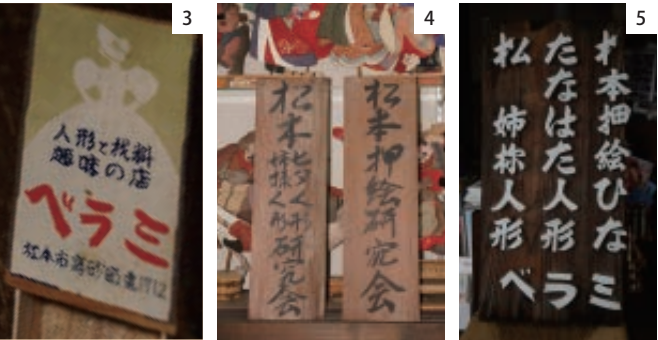
平成になり、たまたまご縁があってお店を拡張、そちらを展示室にするつもりで現店主の三村隆彦が考えたのが「ひいなの家」。ひいなどは雛、実物より小さいもののこと。ベラミのロゴは変わらずリボン調、ひいな「な」の字は昔の字を使い和風感を出している。同時に松本にもインバウンドが増加し始めてきたため、主人の幼稚園からの先生であったパトリシア・ジャンカーさんに相談し、外国人にもわかるようにと英語表記の看板をつけた。さらに、写真 1 にある現店舗向かって左側、従来の店の看板が劣化していたため作り替えて勤亭流調の商品案内看板をつけた。三点とも製作者は隆彦の同級生のお父様、田中看板店さん。

そして五年前程にはミシュランガイドを手に来店した外国人観光客に店の外国語表記が無いと言われ、急遽ショーウィンドウにフランス語表記の店名を貼った。これは女性向けのお人形が多いことから女性名詞を使った。製作者はアルブの小林さん。

店主である主人に一言を尋ねてみると、「看板を通して両親のその時々仕事を俯瞰しながら改めて思うのは、縄文の土偶からはじまり令和の現代まで時に愛玩具、時に祈りの形となり、人々の想いに寄り添ってきた日本の人形文化をなんとか次の世代に渡し



2. 昭和 39(1964) 年 10 月、ベラミ店舗前で聖火ランナーを待つ人々
現在の店舗右側は当時書店だった



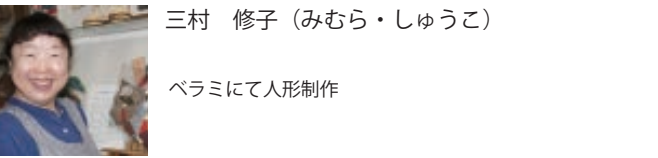
3. 高砂町にあった時代のマッチ箱
4. 松本押絵復活に取り組んでいたころの表札
5. 今は使っていない木とプラスチック切り文字の看板



7. 仏語表記のベラミ



8. 店主の三村隆彦



三村 修子 (みむら・しゅうこ)

ベラミにて人形制作

平成 25 年に店の前に出来た大型ビルにより美ヶ原が見えなくなって、日常の景観が著しく変わったことを残念に思うとともに、景観の重要性に気づきました。それ以来素人ながら景観のいろいろを知りたくて、関係の公民館講座に出席しています。日頃の仕事では触れることのない物事に対する好奇心の充足と息抜きとを兼ねて (失礼!)、中央公民館主催の看板講座に 2016 年よりずっと出席しています。

錆びた鉄

鍛冶町（女鳥羽川沿い）

はなや和花・・・生花店

高柳 英範 | TAKAYANAGI Hidenori
雲を愛でる会会員（The Cloud Appreciation Society：Member 23,018）

スターウォーズ：エピソード4「新たなる希望」では、それまでのSF映画では考えられない錆のあるエアカーや、使い古されたロボットが、新鮮な表現として注目された。宮崎駿「もののけ姫」では、製鉄のために森を破壊するタタラ衆と森の神との拮抗が描かれていた。さて、世界のしくみが変わりつつある2020年、私たちは確かなものを探しあてることができるだろうか。



遠いまなざしから

幹線道路の裏手に静かな佇まいの花屋があった。例えば勤め帰りに、飲んだ帰りに、ちょっとした花束を求め、ふらっと寄るような店ではないことは、その店構えからも推測できた。しかし周辺が工事などで騒がしくなった頃からそこは閉店したのだろうか、人影もなくなっていた。

松本でも魅力的なパン屋やレストランが突然閉店することはある。確かな技術があれば、どこでも仕事ができるし、松本にこだわらなくても大きな都市に出れば、もっと広く客を求めることができる。この店もそのようにしたのだろうか。

そんなことを考えていたとき、少し心当たりがあって、木工作家の前田大作さんの松本市内での拠点「アトリエ城東スタジオ m4」を訪ねた。ここは松本ならではの木材を生かした家具などをゆったりとしたスペースで見せる落ち着いたギャラリーだ。木材でできた、渋くも現代的な看板を期待してきたが、入り口には

錆びた鉄でできた現代アートのようなものが立っているだけで。木工作家のギャラリーなのに理由を尋ねると、鉄は様々な処理をした上で指物の金具などにも使う、木材とも相性のいい素材なのだそう。

「前田さんが手がけた看板は他にもありますか？」と聞くと「和花」という花屋があるという。もしかしたら、あの時の花屋ではなかろうか。東町を下って女鳥羽川の鍛冶橋近くに花屋らしからぬ様子の建物があった。

花屋というものは、明るい窓ガラス、季節の花や工夫された寄せ植えなどが飾られ、街のアクセントになっているところが多い。でもこの店は違う。外から花は見えないし、錆びた鉄の立看板が入り口にあるだけだ。近づく（写真1）、「m4」の看板（写真2）と似てはいるが少しニュアンスが違う。高さは1m程度、幅も30cmに満たない（写真3）。

新しいものを生む人のつながり

店主の池貝さんが木工作家前田大作さんに看板の制作を依頼したのは、レストラン鯛萬での前田さんの結婚式で知り合ったからだと言う。でも前田さんは「いや、以前から『和花』の客でしたよ。確かに僕の結婚式に飾る花の打ち合わせでお互いに知るようにはなったけれど。」と言う。どちらの仕事も顧客の気持ちや暮らしを深く理解しないとできない創造的なものだから、無意識のうちに共感を覚えたのだろう。

それにしても、花という生モノを扱う店に、錆びた鉄板の看板は相応しいものだろうか。

「和花」は注文に応じてイベントなどに花を設えるスタイルをとっている。不特定多数の客ではなく、ホテルやレストランなどと契約しながら、特別な時間に、最高の空間を提供することを旨としている。そのような時、必要とされるのは、確固たる技術と信念である。



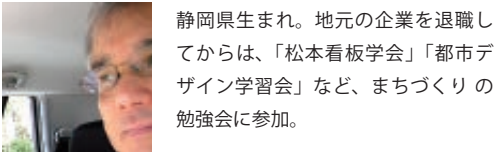
1. マークと店名が鉄板に透かしで入れられている看板。錆出し後、植物油で留めるので鉄粉が手に付着しない。
2. きっかけとなった「m4」の錆看板
3. 店先の様々な素材が配置されている。その中にも強い存在感がある。
4. 池貝彰一郎さん 東京都出身。大学卒業後、株式会社日比谷花壇に入社。帝国ホテル店、ブエナビスタ店、青山ダイヤモンドホール店、京王プラザホテル店などを歴任。2004年「和花」を創業。
5. 池貝さんの弟さん（一級建築士）がデザインした初代看板。印鑑風のマーク、鉄錆仕様にしたことなどが、現在の看板にも継承されている。

6. 店の向かいにある女鳥羽川に降りる階段は鉄製。店舗の看板と街の設えが呼応している。鍛冶橋もその名にちなんで鉄製であればいいのに。
7. 松本市出身の建築家柳澤孝彦設計の店舗兼住居。池貝さんの奥様の知人からの強い勧めで設計をお願いしたそう。2017年、地鎮祭の日に柳澤が他界したためこれが最後の作品となった。柳澤は東京オペラシティ、東京都現代美術館、松本では深志高校教育会館など公共施設を多く手がけたが、個人の店舗兼住宅は珍しい。池貝さんは「店の中は洞窟のようでしょ」と冗談めかして言う。花の管理のためには外からの光は必要ないそうだ。

大地や森への畏敬の念を抱かずにはいられない「鉄」という素材、それに加えて長い時間が作りあげた「錆」を取り込んだこの看板は、職業人としての矜持に極めて忠実なものかもしれない。花と同じように鉄も、そして錆を生む水や空気も自然からの恵みだ。長年、東京の都心で仕事をしてきた池貝さんは「松本は東京周辺の街よりずっと都会的です。」と言う。「花に対する考え方も、松本の人はちゃんとお金をかける。身近にある自然の中の花と我々が提供する花と別だということを理解しているのだと思います。許容量も大きい。」

客の好みや考えを丁寧に聞く姿勢、多岐に亘る人脈、大胆な冒険ができるセンス、そんな池貝さんのビジネスに対する考え方を象徴するかのような看板。混迷を続け出口の見えない時代に置かれた私たちに今できることは、自信に満ちた看板がある、素敵な店の入り口に立つことだ。

高柳英範（たかやなぎ・ひでのり）



静岡県生まれ。地元の企業を退職してからは、「松本看板学会」「都市デザイン学習会」など、まちづくりの勉強会に参加。

高校の修学旅行で初めて松本を訪れました。自分が育った海岸地方とは気候も文化も違う松本は異国のようだと感じたものでした。自由行動で「松本民芸館」を見ておきなさいとの教師の言葉を聞かずに友達と「フォルクスラーメン」を食べにゆきました。見学したのはそれから20年後、松本に移住してからのことです。あの時、言いつけを守っていれば、こんな大人にはなっていなかったかも。

人と触れ合う 餌差町（女鳥羽川沿い）

ニチカ・・・髪を切らない日だって立ち寄れるヘアサロン

小林 湾 | Kobayashi Mikuma
松本市都市政策課都市デザイン担当

松本市の中心部を流れ、松本の人々に馴染みの深い女鳥羽川。そのせせらぎが聞こえる川沿いに、フラッと立ち寄りたくなる雰囲気醸し出すサロンがある。

そこは髪を切るだけでなく物々交換でお茶をいただく事ができ、快適なランニングの拠点にもなる場所だった。



柿の木が良い感じで美容室ってかかりつけ医みたいだなと常々感じる。髪のことはもちろん、仕事や趣味の事、家族の事までいろいろなことを話して分かち合う。だからこそ、気兼ねなく居心地の良い場所であってほしいと思う。県宝「旧念来寺鐘楼」の川向こう、女鳥羽川沿いにそんな居心地が良く、ちょっと不思議な美容室`ニチカ、がある。店主のクマイヨウコさんが、以前に働いていた京都のお店を辞めて地元である信州に戻ってお店を始めてから6年になる。`ニチカ、という名前は、その響きが好きで、子供が出来たら付けたいと思っていた。そんな中、「店も子供みたいなもんじゃない？」との友人の一言に後を押され店名にすることを決めたそう。漢字でのイメージは日曜日の`日、に、お花の`花、。お客様の綺麗な花を咲かせたいというイメージだそう。`お店の場所は川沿いにしたいくて、色々な場所を歩いて探していたところ、店の外の木がすごく良い感じでここに決めたんです。」とクマイさんは

語る。ただ、植物には詳しくなくて樹種までは分からず、桜の木かな何かなとワクワクしていたら、秋に甘い実をつける柿の木であった。

お店の看板の文字は、クマイさんの手書きである。イラストを描くことも得意で店内にある毎月のお知らせやポップもご自身で書かれている。

外にある室外機などを隠すために目隠しの壁を設置し、その壁自体も看板となるようお店のロゴを入れ、植栽も施し外観の設えを整えた。入口の照明にも店名が入っている。印象的な外観の中でも特に目を引く地面のオレンジ色は、細かく砕かれた瓦である。昨年、雨漏りがして屋根を直してもらった業者のおじちゃんに、店先の水はけが悪くぬかるみになってしまうと話したところ、それじゃ可哀そうだからと2セトラックで瓦を運んできて撒いてくれたそう。2階の壁のトタンもその雰囲気が好きだと話をしたら余っているトタンを持ってきて貼り付けてくれたそう。

お代は頂きません

お店の一角にドリンクを提供しているカフェコーナーがあるが、そこではお代を頂く代わりに物々交換でドリンクを提供している。なぜ美容室にカフェがあるのか。

以前に働いていた京都のお店で店の外の掃除をしていたときに散歩をする近所のおじちゃんとはよく話をするようになったそう。そのうちに髪を切るわけではないが、お土産を持ってお店に来てくれるようになったそう。美容室は髪を切る時にしか行かないのもだが、それが少し寂しく感じて、用が無くてもお店に来てほしくてカフェも始めたそうである。しっかりと営業許可を取ってやっているが、カフェについては専門ではなくてお代は頂けないので、代わりに物々交換でドリンクを提供し始めたそう。交換

の品としてはお菓子や本などがあったが、今までにあった珍しいものとしては、お店をモチーフにしてお客さんが作曲して下さった曲や店主の好きなバンドが県外から来て、生演奏をしてくれた事もあるそう。

そんな人との繋がりを大切にするお店だからこそ、わざわざ京都や県外から足を運んでくださるお客さんもいらっしゃるとのこと。外の空気も感じていたいとクマイさん自身が赴いて外で腕をふるうこともされているそうである。

オンラインで遠隔で人と接することが当たり前になってきつつあるが、直接会って、触れて、会話をすることの大切さを再認識させてくれるお店である。

髪は切ったばかりだが、またふらりと顔を出したいと思う。



1. 色合いがとても美しい外観。夜は間接照明により昼とは一味違った顔を見せてくれる。
2. 川沿いのサインポール。お店のロゴにもなっている店名の文字は店主のクマイさんの手書きである。
3. 店内には多くの絵本や漫画、小説、写真集などがある。中には物々交換で来店にやってきた本も。
4. 店内の一角にある物々交換カフェ。フラットとコーヒーを飲むためだけに訪れることも出来る。
5. 毎月のお知らせやキャンペーンの内容が書かれた黒板。
6. 物々交換でお客さんからお店に歌の贈り物。「ニチカ行進曲」他に「不思議な美容室（ニチカのテーマ）」もある。
7. 緑に囲まれてまったり、ゆったりと過ごせる待合スペース。テーブルの上には、各種イベントのフライヤーが。我が看板学講座のものも置いていただいている。
8. クマイさんがつくるステキなスタイルに惹かれてお客さんが集まる。

小林湾（こばやし・みくま）

2019年に松本市役所入庁。都市政策課都市デザイン担当に配属となり屋外広告物・景観行政に携わり、同年より松本看板学会に参加。事務局長として臨んだ法規制のレクチャーでは、本題から脱線した熱い議論を学会員と交わした。

町会長は彫金師

裏町～鯛萬小路

鯛萬の井戸案内看板・・・平成 29 年度裏町看板學會番外編ワークショップ

小林 一成 | Kobayashi Kazunari
松本市都市政策課都市デザイン担当（～ 2020.3）

旧善光寺街道東町の裏にあたる「うらまち」は、肩がぶつかるほどの歓楽街として隆盛を極めるものの、今や残る看板から往時を辿る夢の跡……。夢から覚めた通りからほの暗い隙間を指さす看板は、裏町の裏のうらへと誘い込む。このただならぬ存在感は、講座から派生したプロジェクト参加者の協力の賜物だ。



物語の幕開け

その昔、東町の裏に位置したことから呼ばれた「うらまち」は、三味線が聞こえる花街だった。いまでもその名残がそこかしこに感じられるが、中程にあった料亭鯛萬のあずまやのある井戸は周囲の方に愛されていた。そこに通じる建物の隙間はいつしか鯛萬小路と呼ばれ、料亭なき今、井戸のある小公園と形を変えて地域に親しまれている。入口には、くたびれた案内看板と穴の開いた杉玉が掲げられていた。杉玉といえば、造り酒屋の新酒の時期に新調されるものではなかったかと調べたところ、道しるべとして辻などにも用いられたようだ。

この看板を松本市が付け替えようとしていたのが平成 29 年（2017）のことだ。当時、裏町の看板から歴史を探る自称裏町看板学会と名乗る講座が 2 年目を迎えていた。

裏町の看板を考える講座を企画して、そのこの公共看板を取り上げ

ないのでは学会の名が廃るという意気込みで、講座番外編「鯛萬の井戸看板」のデザイン検討ワークショップを企画した。とはいえ、予算が少なく案が活かせるか心配していた。

看板付け替えのため地元の下横田町会長巢山氏に相談したところ「協力するよ」の一言で製作に協力頂くことになったのだが、なんと町会長は彫金を生業としていたのだ！素材は比較的彫りやすく安価で調達できる銅板にする、長谷川学会長からは本業の C G 支援や経済的でスマートなフレームのアドバイスをもらうなど、そこからはとんとん拍子で実現可能なデザイン案にまとまっていったのだった。

銅は一見きらびやかで派手に見えるが、風雨にさらされると緑青をふくか黒く酸化するため、趣はあっても明瞭さにかける。そこで、あらかじめ薬剤で黒く酸化させた盤面を彫り込み、その後、塗料で保護することにした。また、案内サインの機能を確保する

ため、専門誌 signs の事例集を参考にシンプルに抑える部分と表現する部分のメリハリをつけることに。全体を彫り込みたいやる気みなぎる巢山職人町会長に、この方針をご理解頂くまで何度も話し合ったのだった・・・。

巢山氏は「こんな大きな板は初めてだから、どれだけ時間がかかるか分からない」と言われてドキドキしていたのだが、そこは職人、1 ヶ月で彫りあげた。素晴らしい出来栄になったことは言うまでもない。「柔らかくて大変だった」とのこと。銅線を想像すると納得なのだが、金属といえども銅は確かに柔らかい。

このプロジェクト、酒井工業所の片桐氏の活躍なくしては成しえなかった。酒井工業所に発注後、営業の片桐氏が自ら銅板の酸化

作業→彫り上がり後に自ら保護塗装、組立、設置ということで少ない予算内のなか、片桐氏の見えない活躍には感謝しかない。

この講座から派生したプロジェクトは、思いもよらずプロセスデザインを大切にした満足度の高いものに成長していた。この良さは看板の周囲にだけでなく、関わった方々にも影響を与えているようだ。この看板を前に幾度となく当時の苦労や自慢話を繰り広げているはずだ。

久しぶりに訪れると、杉玉跡には手の込んだおひさまが微笑み、足元にはカエルが鎮座していた。穏やかな昼下がり、訪問者を建物の隙間からあたたかく出迎えている。



- 鯛萬小路入口には井戸案内看板のほか各店舗の温かみのある看板、上部の横丁らしい名店街看板が賑やかで、入口らしさを演出している。
- 南面は躍動感のある鯉の彫り物。特定のフォントは彫りにくいのことで、彫金に適した独特の字体。
- 長谷川学会長による CG パースで、完成後をイメージしながら細部を検討。杉玉部分は道路にはみ出ているため、看板設置は断念した。
- 以前の井戸看板。こちらは二代目で木目調シートに看板屋さんの手書き文字が時を経て、木板の様相を呈している。初代は手作りの木製看板だ。
- 「平成 30 年 3 月吉日 巢山篤夫 彫刻」の文字。出来上がったのは年度末ぎりぎりだった。



- 彫りが完成した銅板。矢印のまわりと左下部分は自由に表現して頂きたいとお願いし、巢山氏がいくつも素案を作成したのち、この図柄になった。
- なくなった杉玉の跡には、少し怪しげな雰囲気太陽が微笑んでいた。深く探らないことにしているが、看板と同素材だ。
- 看板の重しに置いた石は、時を経てカエルに。この界限にある愛着の表れではないか。
- 鯛萬の井戸小公園。建物の隙間のような小路を抜けると別世界が広がる。



小林一成（こばやし・かずなり）

2020 年 3 月まで松本市都市政策課都市デザイン担当に所属。2016 年から松本看板学講座をはじめ、講師、参加者と共に身近な看板を題材に街の景観を語りあっている。

昭和の香りを伝える

清水銀座通り

やきとり・炉ばた焼 田内屋

降旗 都子 | Frihata Miyako
清水銀座のお嫁ちゃん

町の中心部からはちょっと離れた住宅街。かつて清水銀座と呼ばれ、松本の銀座として栄えた商店街をタイムスリップしたかのように思い出させてくれる看板がある。

昭和の香りとやきとりの良い香りについつい引き寄せられ、赤と青の暖簾をくぐると、甲高く「いらっしやーい」と素敵な笑顔の店主が迎えてくれる。



家の歴史と町の歴史を伝える

田内屋さんは100年前位、今の店主の祖父母が餃子屋さんとして源池と清水で営んでいた時の店名。チェーン店の大吉として焼き鳥屋をはじめたが、自分の店を持つ時は祖父母の営んでいた「田内屋」と言う店の名前を使うと決めていたそう。田内屋の『屋』の字は家の屋台骨を人が支えているとの意味を込めデザインされている。店内の昭和の雰囲気、暖簾など全て店主自身が考えたこだわりのデザインである。

かつて日本で製糸業が盛んだった時代、大正15年から昭和39年まで、松本駅から浅間温泉まで路面電車（通称チンチン電車）が走っていた。旧山辺街道と呼ばれるこの通りの近くに「清水」駅があり、仕事帰りの乗客が山辺方面に買い物をしながら帰ったことで賑わい、清水銀座と呼ばれるようになった。昭和30年代

までは、この商店街に売っていない物は何もないと言うくらい何でも揃ったという。

その当時の事を「一本道で買い物が全て終わった」と懐かしそうに店主は話す。昭和40年代に入りスーパーの進出やカタクラモール（現在はイオンモール松本）の出店で閉店する店が増えていき、今では数店舗が残るのみ。看板のいたるところに「清水銀座」と刻まれているのは、何らかの形でこの「清水銀座」の名前を思い出して欲しいとの店主の思いからである。この看板が無ければ今は住宅街にしか見えない。店主は「自分はこのまちに生まれ、育ててもらったから思い出が沢山あるんです。店に来るお客さんと昔話をすると懐かしくてね」と清水銀座への愛着を語ってくれた。

この田内屋さんの看板、地域の子どもたちの歴史学習にも一役

買っている。中学校の総合学習でまち歩きをすると、当時を知らない子どもたちもこの看板を見て「清水銀座って何？」と質問してくれるのだ。店主の思いがたくさん詰まった看板は、歴史を伝えるまちの宝だ。



1. 店に入ると更に昭和で溢れ、タイムスリップしたかのようなのである。懐かしい映画のポスターや長嶋茂雄の野球ポスター、ボンカレーの広告、ブリキのおもちゃ等で溢れかえっている。店の外にも看板。店の中にも看板なのである。店の中の看板は昭和という時代を伝えるインテリアとして生きている。ノスタルジックな空間に、春夏秋冬を感じられる飾りがされている。店主によると、この飾りにも意味があり、清水銀座が栄えていたころ、街頭に春は桜の飾りが、秋は紅葉が飾られた。それで季節感を感じる事が出来たので、再現しているのだそう。常連さんが飽きないようにとの気遣いでもある。

2. 店の中には2種類の暖簾がかかっている。一つは丸形的に矢が刺さっているもの。的に書かれた十字は「田」の字の十字を表し、田の中に矢が刺さる事を表していると言う。もう一つは田内屋の家紋、梅鉢を表したもの。箸入れなどの小物のデザインも工夫されていて、どれも田内屋のロゴが入る。毎月変わる季節メニューには睦月、如月など旧暦の和風月明が使われ季節感を感じさせてくれる。

このような細部の工夫は常連客も飽きさせない。そして、家の歴史とまちの歴史、両方を大切に作る店主の思いが店内全体に溢れ、お客さんを温かく包み込む雰囲気をかもし出している。そんな田内屋には平日でも老若男女、幅広い年代で賑わい、昭和のバックミュージックの中でお酒を酌み交わし皆おしゃべりに花を咲かせる。

3. 「屋」の字に屋台骨を支える人の意が込められた暖簾の文字

4. 店内には清水銀座の歴史を伝えるような昔あったお店の写真が並ぶ。店主が開店前に近所を訪ねて探し出したもので、昭和30年代の懐かしいお店の雰囲気を感じることができる。この左側の写真は、かつてお米屋だった我が家、降旗食料販売店である。

5. 屋根の上から自転車がお客さんを迎える

6. 夜、店の前を通ると赤ちょうちんと昔の街頭のような裸電球がなんとも懐かしさをかもし出し、ついつい引き寄せられて暖簾をくぐってしまうのだ。

帰る時には、店主からこの笑顔で「お疲れサンキュー。夢で逢いましょう！」と声をかけられるので、またすぐに行きたくなる。お客を引き寄せる効果としては店主もこの店の看板なのである。

降旗 都子（ふりはた・みやこ）



元保育士
現在はブドウ農家
松本市第三地区まちづくり協
議会 副会長

松本市の東の山に生まれ、まちにお嫁に来て、また今は毎日山のぶどう畑で松本のまちを一望しながら仕事をしています。私が清水銀座にお嫁に来て30年。我が家も食糧販売店でしたが平成8年に閉店。近所にあったお店も軒並み無くなってしまいました。そんなイオンモールが来て激変していく第三地区で、子どもたちにまちの歴史を伝えたり、地区の広報係をしています。

時代を越えるおもてなし

和泉町

和泉町伍蔵・・・蔵がつなげる異文化コミュニケーション

児玉 真弓 | Kodama Mayumi
安曇野と人を繋げるコーディネーター / 信州おもてなしマイスター

母屋と蔵をリノベーションして、おしゃれな看板が並ぶ和泉町伍蔵。

安政の大地震後に再建され明治の2度の大火にも耐えた江戸時代の蔵、大火の後に建てられた明治時代の母屋と蔵。歴史ある建物に新たな息吹が吹き込まれ、善光寺街道に新たな道を切り拓く。



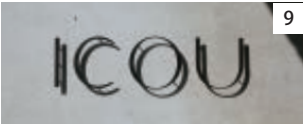
蔵の歴史と息遣い

松本の中心部から北へ向かう善光寺街道沿いの和泉町に築150年の蔵を始めとする「蔵群」伍蔵がある。江戸時代に穀物を、明治時代にはお茶を扱っていた商家であった穂高家の母屋には立派な梁が見えている。

松本城下は江戸時代、明治時代と何度も大火を経験してきた。この場所も松本の明治3大火のうち、明治19年と明治45年の大火に見舞われた。大火によって多くの建物が焼失した経験のなかで、火災に強い土蔵づくりの建物が造られ、「なまこ壁」が一般化した。(なまこ壁とは、壁面に平らな瓦を貼り、継ぎ目に砂漆喰を蒲鉾型に盛り上げて塗る工法のこと。盛り上げて塗るのは雨水などの侵入を防ぎ、剥がれ落ちないようにするため)

穂高家所有の蔵は、最近まで倉庫や学生寮に使われていたが、活用

方法が見い出せず、取り壊して駐車場にする案まで出ていたそうである。こんな立派な蔵を壊してしまうのはもったいない・・・穂高家の次女、千恵美さんがエステサロン（ICOU 衣香）を実家へと移転するのをきっかけに古い蔵をリノベーションをすることにし、2017年に地元の空き家再生チーム「そら屋」が本格的にプロデュースを開始。「ICOU～衣香～」のオープンを皮切りに「花屋彦兵衛」、カフェダイニング「OLDIES B GOODIES」、コーヒースタント「High-Five」、2020年にはアウトドア用品と雑貨を扱う「CLAMP 松本店」と現在は5店舗のテナントが入る。和泉町伍蔵全体の看板はまだないが、来春に設置する予定とのことで、この歴史ある建物に歴史を重ねるであろう新しい看板がどんなものになるのか今から期待が高まってしまう。



そもそも、私がここを取り上げたのは、古きを生かし命を吹き込む「蔵群リノベーション」へのチャレンジに心酔したからだ。多くの人が行き来する善光寺街道の賑わいも時代とともに変化した。多くの車の往来へと変わり、つぎつぎと古いものが取り壊されるのがあたり前の現代で、旭町の和泉町伍蔵は歴史を繋ぎ、人を繋ぐ新たな場として生まれ変わった。このプロジェクトは、地元メディアでも何度も取り上げられた。

江戸時代～大正～明治～昭和～平成～令和という激動の時代を、この蔵群は、不変の佇まいで静かに見守ってきた。『朝から人が集う、新しい賑わい』…朝日の差し込む蔵の空間で、コーヒーの香りや集いを楽しむ人々の笑顔や笑い声が聴こえてくる。時代を越えるおもてなしは、新たな看板へと繋がり、生き続けている。

1. 善光寺街道に面する和泉町伍蔵の母屋
2. リノベーション前の母屋
3. テイクアウトもできるコーヒースタンド High-Five の店先は、外で楽しむお客さんの姿も街の看板となっている。
4. 母屋の通路は伍蔵の奥へといざなう風情がある。花屋彦兵衛の草花も立派な和泉町伍蔵の看板である。
5. 花屋彦兵衛（花屋 / 山野草 / 寄せ植え / 盆栽）の看板
6. 母屋の通路に掲げられた OLDIES B GOODIES（カフェダイニング）の看板。この看板の横に入口がある。
7. CLAMP 松本店（アウトドア用品＆雑貨）の看板の横に階段があり、2Fの店舗入口になっている
8. エステサロン ICOU 衣香（美容エステサロン）が入る蔵
9. ICOU の切文字サイン、日が当たり切文字と影が漆喰の白に映えて美しい
10. 中庭と蔵の様子、かつて使われていた井戸も残る
11. 入口の電球や飾られたコーンも洒落ている

児玉真弓（こだま・まゆみ）



安曇野と人を繋げるコーディネーターです。信州おもてなしマイスター＆安曇野案内人倶楽部ガイドです。長野県の素晴らしい『場』と『人』の御縁を創ります。

逸れていく話、繋がる風景

安原町

そればな

荒井 健 | Arai Takeshi
松本市 建設部 建築指導課

善光寺街道に沿ったまちなみの一角に、2020 年 5 月に開店した「そればな」。

静かな佇まいの中に、このまちの風景がそっと繋がっている。



松本には、既存の建物を活かしたセンスのいいお店がたくさんある、というのが、僕がまだ県外に住んでいた頃、旅行者として松本を訪れるたびにいつも抱くこのまちのイメージだった。「10cm」「ラボラトリオ」「葉日」「本・中川」などだ。

それから松本に移り住み、この伝統的なまちなみの中にそういったお店が他にもたくさんあることを知った。それらの店舗は、決まって、これみよがしに自己を主張しない。昔のお店の看板をそのままに、既存の外観にはほとんど手をつけないことも少なくないようだ。

それらの店舗の店主は、もともと松本出身というわけではなく、様々な縁があり、このまちが好きになって、いまに至るというケースも少なくないときく。

2020 年 5 月に北深志に開店した「そればな」もそんなお店のひとつだ。グルテンフリーのお菓子と、お茶を提供するそのお店

も、やはり外観にはほとんど手をつけず既存の建物を改装したもので、看板もお店の入り口に、小さく地面に立てかけられているだけだ。宝栄寺に抜ける善光寺街道に沿ったまちなみに馴染んでいて、意識をしていないと見落としてしまいそうである。立てかけられている看板はブリキでできており、お店の名前も同系色で表示されていて、白く塗られた外壁に馴染む。

このお店を一人で切り盛りしている店主の三宅利佳さんに話を伺うと、ブリキの看板は、古道具屋さんで見つけた古い引き出しで、それをひっくり返して店名をレーザープリントしたものとのこと。お菓子とお茶を提供するお店を出すにあたり「とらや」のような和の雰囲気イメージしたという店名ロゴは書家の華雪さんによるものだ。看板に添えられている風知草は、開店祝いにもらったもので、季節ごとに表情を変えるのがいいという。

店名の「そればな」というのは花に由来したものだと思って話を

伺っていたら、「逸れていく話」を略して、「そればな」。喫茶店で、友人とたわいもない話を延々とする、そんなシーンを想像しながらつけたそうだ。

そしてさらにその由来は、スチャダラパーの名盤『WILD FANCY ALLIANCE』に収録されている「そ・れ・ば・な」からきているというから驚きだ。

洗練されたシンプルな空間の背景に、三宅利佳さんの愛聴する 90 年代のラップミュージックがあり、店主の趣味がこっそり顔を覗かせていているのを知ると、自然と愛着が湧く。

もし看板が店名を表示するだけのものではなく、お店の佇まいそのものを表すものだとすれば「そればな」の場合、立てかけられた小さな看板や、そこに添えられた風知草だけではなく、入り口に掛けられた白いのれんが、その役割の多くを担うように感じる。白いのれんが風に揺れる時、まちなみに馴染むようにいるそのお店に、意識がつかまれる。そして目を向けると小さく看板と風知草が添えられており、窓からはお店の中の様子が伺える。

三宅利佳さんは、この白いのれんは、中町通りにある工芸店「陶片木」ののれんを見て、その佇まいに惹かれて設置したと、教えてくれた。

お店の背景や在り方は違うけれども、まちなみそのものが世代をこえて緩やかに繋がっていくことに、「そればな」を通してこのまちの魅力を感じた。

開店準備中、「本当は“ちゃんとした”看板を設えよう」という思いもあったようだが、古道具屋を巡っていたところ、いまの看板となるブリキの引き出しとの出会いがあり、現在の立てかけられた看板のかたちにとどり着いた。

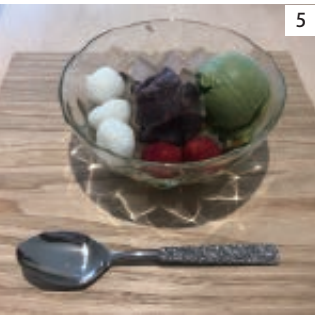
今後のことは聞きそびれてしまったが、別のかたちであらたな看板が設えられるのか、開店準備中たまたま出会った小さな看板が、今あるようにそこに添えられた風知草や白いのれんとともに「そればな」の佇まいとしてこれからもその場所を、まちへむけて表していくのか。時が経ち、振り返った時どんな物語が紡がれているのかとても楽しみである。

1. そればな外観。
2. 宝栄寺に続く善光寺街道のまちなみ。向かって右手の建物が「そればな」。
3. お店入り口、外側にかかるのれん。お店の中からも風に揺れる様子が伺える。
4. ブリキの引き出しの裏にレーザープリント。スチャダラパーの楽曲が店名になっているとは想像できない。
5. 夏から初秋にかけて季節限定のあんみつ。美味しい。
6. 内装は安曇野市の竹内裕矢設計店。松本市では peg の内装も手がけているようだ。

荒井健（あらい・たけし）



1982 年生まれ。
千葉県茂原市、東京都八王子市、東京都武蔵野市を経て、2018 年に松本市に移住。
休日はラジオを聴きながら掃除をしたり、本を読むのが好き。ラジオネームはあらいちゃん。jwave でたまにメッセージが読めます。



あの看板は今

梓川丸田 長野県道 278 号沿い

丸田公民館・・・姿を変えても変わらない憩いの場

樋口 美智子 | Higuchi Michiko
第三地区公民館 主事

丸田地区・・・不便もあるけれど、魅力が勝る。
ジャンプしただけで崩れそうだった公民館は 14 年を経て変わっていた。
私の記憶の公民館、これからの公民館。



丸田地区は梓川に沿う河岸段丘の上にある。場所によって住民の年齢層も異なり、下段は比較的若い世代が多く、「丸田団地」と呼ばれている。一方で上段は古くからある住宅が建ち並び、リンゴ農家も多く住宅の隣にリンゴ畑が広がる。筆者の住まいは上段にあり、筆者の家も含め周辺の住宅は室町時代から存在していたと言い伝えられているが、その面影を今は感じる事ができない。しかし今なお丸田町会では住民同士の交流が深いという点からすれば、室町時代からの歴史が繋がっていると言えるだろう。写真からも感じ取れると思うが、丸田は田舎である。「梓川地区に住んでいる」というとスーパーやドラックストアなどが身近で便利なイメージがあるようだが、丸田地区は真逆である。最寄りのコンビニでも車で 10 分、徒歩 1 時間と生活用品を購入する場所がない。公共交通機関と言えば、電車は上高地線波田駅まで 2km 以上、バスは一日 5 本のみ。筆者の近所のバス停の終電は

朝 8 時である。そして獣害にも悩まされる。山には無数のサルの群れ、畑に現れては育った野菜を引き抜き、食べるわけでもなく遊んで帰っていく。威嚇だけでは彼らを止められない。非常に厄介な生き物と共存せざるを得ない。しかしそれでも私が住み続けるのは、丸田のどこにいても絶景スポットが楽しめるからである。かつて上高地方面へ向かう道中であった丸田、上高地方面へ向かうときは山々が迫ってくるかのような迫力がある。天気の良い日は青空が澄み渡って見え、夜は星空が一望でき天然のプラネタリウムに姿を変える。私はこの絶景に魅了され、どんなに不便であったとしても住み続けていきたいと感じてしまうのである。丸田の絶景は昔から変わらぬ私にとっての看板となっている。住民交流の豊かさもまた丸田の魅力の一つである。住民交流を支え町会の看板的存在であった昔の丸田公民館は老朽化により平成



26 年に改築された。小学生の頃は夏まつりなどの行事が公民館で開催されよく訪れていたが、以降一度も中に入らず姿形を変えてしまった。今も残る筆書きの看板を見ると、子どもの時の記憶が公民館の建物とともに蘇る。丸田に暮らす人々の交流をこれからも支えつづける丸田公民館、時を刻むにつれて新しい公民館も看板的存在に育って行って欲しいと願うのである。

1. 平成 26 年に改築された丸田公民館
2. 丸田地区は梓川の河岸段丘上にある
3. 旧丸田公民館は木造 2 階建て、1 階は大ホールとキッチン、2 階は会議室のみであった。キッチン以外はお座敷であるため、椅子や背の高い机は少なかった。床は底が抜けそうな箇所が所々あり、小学生が歩いてもシシシと音を立てた。それでも夏には夏まつり、お正月には三九郎のまゆ玉づくり、町会役員の会議の場など他の公民館と変わらない賑わいを見せていた。
4. 昔の公民館の看板は正面玄関の下駄箱上に置かれていた。馴染み深い木製で筆字の看板は、今なお玄関口で利用者の姿を見ていた。この看板の誕生秘話は不明だが、ひょっとすると、かつてあった公民館講座で作られたもののなかも……？
5. 現在の公民館は木造平屋建て、大ホールのほか会議室、和室、キッチン、部屋が増えたことより旧公民館にはなかった廊下もできていた。床はフローリングで、ご高齢の方でも座りやすいよう会議室は椅子が用意されている。公民館の玄関先には、鉢植えがいくつもあり、町会の利用者がこまめに手入れをしているようだ。また、月 1 回「ニコ・デ・サロン」が開かれており、現在も憩いの場としての公民館の機能は変わらない。
6. 約 15 年前の七夕まつりの様子。笹は公民館の前に飾られ、訪れる人を楽しませた。当時はこのほかにもお年寄りが小学生に教える「まゆ玉づくり教室」や「南京玉すだれ」などの演芸会も行われた。



7. 丸田町会は近隣に 3 つ神社があり、隣組によって参加するお祭りが異なる。公民館では各神社の多種多様な神具を保存してある。公民館の外には 3 メートル以上の山車があるが、祭礼の時以外は見る事ができない。
8. 公民館の隣にある道祖神をよく見ると、間から過去使われていた鬼瓦が。顔を覗かせ、今でも我々の姿を見守っているようだ。

樋口美智子（ひぐち・みちこ）



松本市梓川出身。
2017 年松本市役所に入庁。
今年度から第三地区公民館に配属。看板講座は今年度から参加。

ロマンチック街道の街

安曇野市豊科・下町通り

欧風な豊科の看板群

下田 正志 | shimoda masashi
自由人

凝りに凝った看板がひっそり佇む町、国道147号線を安曇野市に向かって走り、豊科駅入口の信号を過ぎた所から次の新田交差点までの間左右の商店街に広がるヨーロッパ。

看板に歴史あり

安曇野市を通る、国道147号線の豊科駅入り口の信号から次の新田交差点の信号までの約200mの道の両側にある商店街の看板を取り上げました。私はこの近くの会社に16年間勤め、この商店街にも取引のあったお店がありました。ここの看板はずっと気になり、話を聞きたいと思っていましたが、なかなか聞くことができず、会社を退職してしまったのでそのままになっていましたが、今回、念願が叶いました。

今回主にお話を井上薬局の井上社長、マルデンの丸山社長に伺いました。最初に伺った井上さんにこの看板のこと、ご近所のこと、商店街のこと等々伺い、看板のできた経緯などは丸山さんに聞くのが一番良いと、教えていただき次に尋ねました。

ここは下町商店街といい、豊科でいくつかある商店街の一つです。今から30数年前、「ろまんの街整備事業」という県の補助事業がありました。マルデンの丸山社長が中心になり数年をかけ準備し、企画を応募、採用されて「アルプスの綺麗に見える街」を目指してスタートしました。その時この事業の母体として、「トピア協同組合」を作りました。（「トピア」とは豊科+ユートピアの二つを合わせた造語です）

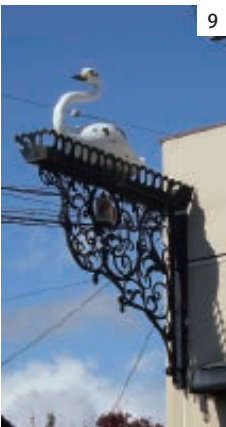
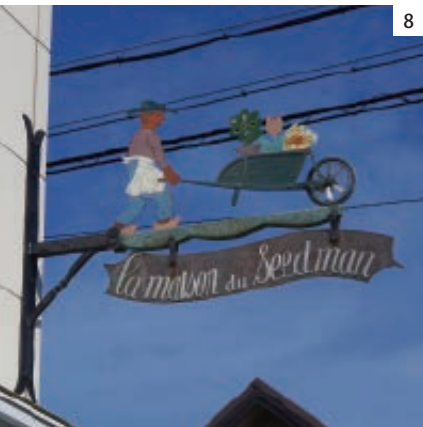
この時、助言をいただいたのが、西洋民藝研究の先駆者と言われる村田新蔵氏で、16世紀～19世紀のヨーロッパで作られたタイルや食器、民芸品、アイコンなどの調度品の収集、研究で有名で「村田コレクション」と呼ばれる生涯をかけて築いたコレクションがあります。また、この看板のデザインも手がけています。そんな関係もあり、アルプス山脈の山々と、ヨーロッパの特にドイツ、フランスなどの文化、様式が参考にされました。それに合わせて、町歩きの楽しくなる、個性があり街並みに溶け込む看板をというところから、下町商店街に現在のような看板が掲げられました。残念ながら、様々な事情により事業は完成していません。また商店街も他へ店舗が移ったりして軒数が減っています。閉店時に看板を降ろす時、長年勤めてくれた従業員の方に看板を贈ったというお店もありました。

お話を伺った商店街のみなさんは、この看板を手入れして大事にしてゆきたいと語っていました。商店街の看板がいつまでも残り続け、当時を記憶し続けて行ってほしく思いました。できれば、

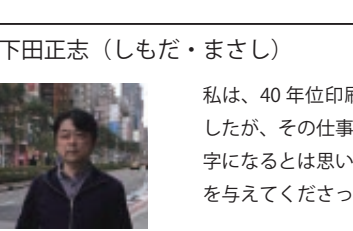


北アルプスの山々が綺麗に見えるロマンチック街道としての豊科の街並みも見てみたい気がします。

- 1. マルデン（電器店、パソコン店）
月と星がレイアウトされているマルデンの看板。1本の木からの削り出し、「天使の舞い降りる店」という意味がある、直接業種と関係はないが、店の繁栄を願って作られた。
- 2. 井上薬局
十字架は、医療の象徴、真ん中の壺は、調合用の薬壺、下のお皿は天秤計りで調剤薬局を表している。
- 3. イノウエ（化粧品店）
紀元前3000年頃のエジプトは男女問わず綺麗なメイクをしていたことからこの看板に、象徴としてクレオパトラ風の女性が真ん中にレイアウトされている。一番下の文字は、ヒエログリフで店名の「イノウエ」と記してある。
- 4. 丸市紙店
アール・ヌーヴォー作品が元になっている。鉄製で植物がモチーフのフレイム、紙製品を扱うお店。



- 5. マルデン
1番の反対から写した写真
- 6. 丸市石油
店のある交差点の角に設置されていて、鉄製で車と左右に給油機、油量計がレイアウトされている。
- 7. 小岩料理教室
これもアール・ヌーヴォー作品が元になっています。料理をしているイラストが描かれている。
- 8. フコク種苗園
作業をする一輪車と下の文字は「種を売る館」という意味。
- 9. 奥原酒店
本物のドイツ製ビアマグがレイアウトされている。上の白鳥は、この店が立っていた場所、移設される前は新田交差点の角にあり、観光地の白鳥湖への目印としての役割もあった。
- 10. 山本金物店
西洋風のやかんがレイアウトされている。金物製品一般を扱う。
- 11. 三原商店（お茶元みはら）
壁についている物はコルヌ・コピアという物で「豊穡の角」と訳され、角の持ち主に、望みのものを与える力があつたとされる。その先に茶壺がレイアウトされている。このお店は現在の、胡蝶庵。



下田正志（しもだ・まさし）



私は、40年位印刷や看板作成の仕事に携わって来ましたが、その仕事を離れてから自分が書いた文章が活字になるとは思いませんでした。今回このような機会を与えてくださった全ての皆さんに感謝します。

まち・駅・商店・看板

安曇野市・豊科駅前

安曇野かわい・・・まちの顔 豊科の駅前の商店

望月 優 | Mochizuki Yu
地方公務員

看板は、景観の一部である。景観はまちの個性となる。つまり看板はまちの個性だと思う。

豊科駅に行き交う人々を出迎え、見送る「安曇野かわい」の看板は、

時を刻み続け、まちの風景に溶け込む



以前住んでいたところは、豊科駅から徒歩5分ほどのアパートだった。ある暑い夏の日、帰宅の折、冷房の効いた電車から降りたとなん、無性に冷えたビールが飲みたくなった。しかし、家にビールはない。通勤路にコンビニもスーパーもない。どうしたものかと考えながら駅舎から出ると、駅前の商店「かわい」の看板が目に入った。それまで特に気にかけてことはなかったが、ビールも売っているかもしれない。そう思って店に入った。そこには、冷えたビールがあった。つまみもあった。言う事はない。缶ビールを2本購入し、早足で帰宅した。それ以来、頻繁ではないがたまに「かわい」を利用するようになった。

というわけで、私の中では近所の酒屋的なポジションを確立した

「安曇野かわい」だが、「安曇野かわい」の川井明子さんにお話を伺ったところ、酒類を扱うようになったのは割と最近のことだそう。創業は昭和26年で、現在は2代目。当初は地元のリングや蜂蜜などを中心に、食料品や生活雑貨などを扱う、現代でいうところのコンビニのような店だった。実際、朝早くから夜は11時くらいまで営業していたという。その後、生わさびの販売とわさび漬の製造を始め、これらは現在でも主力商品となっている。特に生わさびは販路も広く、県外の料理店などへの発送も少なくないという。一方でわさび漬は近所の旅館など、地元の需要も多かった。豊科駅の西にあった東洋紡の工場に来ていた女工さんたちの帰省の際のお土産としても重宝がられたそう。

店は昭和40年代半ばの駅前再開発で現在のような形となる。漬物工場の看板は、その当時のもの。電話番号には局番がなく、「トヨシナ」となっている。歴史を感じてもらうため、あえて直さずに使っているそう。シンプルで、工場らしい佇まいだが、丁寧に感じの良い看板だと思った。

もとの店名は「川井わさび店」だったそうだが、昭和50年くらいに、「安曇野かわい」と名前を変えた。当時、豊科駅前からは須砂渡行きのバスが出ていたため、登山客がよく土産物を購入したそう。酒類の販売も、登山客の需要に応じて平成5年ごろのリニューアルを期に始めた。店舗部分の看板はこのリニューアル時のもの。数年前に外装を塗り替えたときに看板も塗り替えた。緑は安曇野の自然を、青は空と水をイメージしたとのこと。このまちへの愛着とこだわりを感じる。

看板の店名は、民芸調で丸いフォールの字体に統一されており、包み紙や製品のラベルにも使われている。字体のデザイナーははっきりしないが、ロゴマークや包み紙、製品ラベルのデザインは、画家の関喬（せきたかし）氏によるもの。信州土産の定番「雷



鳥の里」のパッケージを描いた方である。インターネットで調べたところ、関山という名で活動していたようだ。川井氏は、仕事でしばしば関氏の自宅を訪れる機会があった。そこにはいつでも季節や来客に合わせた小さな盆栽が飾られていた。出てくるお茶はいつでも玉露。専用の器を使い丁寧に淹れ、干菓子とともに出してくれた。川井氏とは気が合ったのか会話も弾み、いつでも心地よい時間が流れていたそう。関氏は故人となったが、「会いたいと今でも思う。」と川井氏はおっしゃった。関氏の人が頼られる。現在のロゴマークや包み紙を使い始めたのは昭和50年頃だそう。

駅前に酒類やお菓子が買える店があるのは都合がいい。この店を利用するようになる前はてっきり土産物屋かと思っていたが、客層の半分くらいは地元客なのだそう。生まれ育ったまちの駅前にある便利な商店がチェーン店のコンビニでなく個人商店であることを、私は少し誇らしく思う。地元住民が利用する個人商店は、まちの個性であり魅力でもある。その存在自体がまちの看板となり得るものだと思っている。



1. 漬物工場の看板。昭和45年頃のもので、おそらく一番古い看板とのこと。
2. かわいは駅前ロータリーの角地にある。以前は隣に旅館と食堂があったが再開発のため移転、その結果、北側と西側が道路に面するようになった。
3. 店舗の看板は数年前に塗りなおした。「下地を緑にしたら『安曇野』の部分が目立たなくなっちゃった。」と明子さんは笑っていらした。
4. カウンターの後ろにあるロゴマーク。関喬氏によるものを大切に使い続けている。字体は看板よりポップな感じ。

5. 包み紙。白地に水墨画風のイラストで、ロゴマークが落款のようにも見える。以前は黒一色で印刷されていたそう。
6. 製品のラベル。
7. 風を受けるとくるくる回るタイプの看板。いつ頃のものかは不明だが「これも古いわよ。」とのこと。裏面には「わさび漬」とある。

望月優（もちづき・ゆう）



安曇野生まれ安曇野育ちの
地方公務員

趣味は音楽と読書。読書は最近積読が中心。もはや読書が好きなのではなく、本が好きなのではないかと自分を疑い始めている。

大きな木のある商店

安曇野市堀金・田多井

猿田商店・・・むら、ひと、みせが刻む時間を映し出す看板

平林 祐介 | Hirabayashi Yusuke
松本人

私は2代目の看板。約40年前に、先代から地域の広場を見守る役目を引き継いだ。

私が棲むのは、地域の「何でも屋さん」として暮らしを支える猿田商店。

この商店はむらの広場に面して建っている。むらと人びとを昔から見守ってきた。



商店の歴史を刻む看板

安曇野市堀金の山麓線に付む、創業72年の猿田商店。

この商店は、むらの人びとの暮らしや社会の変遷に合わせて、その役割を変えながら、そして生き残るために変わりながら、ずっとむらを見守ってきた。その商店の移り変わりは看板に刻まれ、端々に名残が見られる。

食材からお惣菜、生活雑貨まで、何でも揃う猿田商店はもとは魚屋として始まった。創業へのこだわりが、看板の鯛のイラストや充実した鮮魚からも感じられる。

40年程前に、商品の共同仕入れをするボランティアチェーン「あづみチェーン」に加盟した際に、現在の看板に付け替えられた。当時は安曇野エリアの30～40店舗が加盟していたが、時代は

移りスーパーなどが出店し安曇野も変わった。現在では猿田商店ともう1店の2店舗のみでチェーンを組んでいる。

さまざまな“看板”

外観で目を引くのは、なんといっても杉の大木である。建物や自販機などに囲まれて立っている。というより、ずっと昔から立っている大木をジャマしないように商店を建て自販機を置いているのだ。この杉の大木、夏は木陰を生み出し、冬は雪除けの傘となり、商店や広場を見守っている。これも72年ずっと一緒に寄り添ってきた、猿田商店の大切な生きた看板である。

店舗のガラス越しには、鱈の燻製が見える。秋は焼き芋、冬は干し柿と時季のものを魅せる。こちらは季節を感じさせる看板娘。

暮らしを映し出す看板の集合体

猿田商店は、外観も店内も、様々なメッセージを発信する看板で溢れている。トタンの看板は、白地に赤・青・黒の大きな文字がはっきりと書かれている。広場を挟んだ商店の反対側には自動車の往来の多い山麓線が走り、自動車からでも一步奥まった商店に気づけるようデザインされた、モータリゼーションの象徴的な看板と言える。社会や暮らしを映し出している。

外観には、自販機に、郵便マーク、そして「たばこ」の文字。この商店の機能が一目で分かる。店内はさらにメッセージに溢れている。商品を紹介する文字やイラスト。黒や赤い字の手書きの値札。昔ながらの活気がある商店の雰囲気を残している。鱈の燻製には値札が掛けられている。これだけ印象的な美しく趣のある存在も、この値札により暮らしと結びついた商品であることを思い出させる。また、店主の趣味で溢れてもいる。釣り好きの店主らしく壁には、釣った魚の魚拓や木彫りの魚、登山好きでもあることから、ピッケルも掛けられている。



- 2020年11月撮影。店舗全景と広場。むらの中心で、猿田商店、バス停、道祖神などに囲まれた空間。昔は公民館もあり、子どもたちがよく遊んでいた。右端は配達用バイク。
- 店内には猿田商店がモチーフの大きな油絵が立て掛けられている。ある絵画展でのこの絵との出会いが、筆者を猿田商店へ導いた。商品を紹介する魚介のイラストも、猿田商店に惚れ込んだこの画家の作。
- 店主の猿田孝さん。12年前に大手音響メーカーを早期退職し先代の店を継ぐ。釣りが趣味で店内には魚拓が飾られている。むら中をバイクで配達しては、住民に声をかける。今年も干し柿をつくって店先に吊るした。自販機の上には賀茂神社の舞台飾りも。大好き

- な釣具をいじりながら笑顔でこたえてくれた。
- 2階建ての店舗の3倍はあろうかと思われる杉の大木。むら、商店、広場、そして人びとを見守る。
- 昔に比べ子どもの数は減ったが、店先を通れば互いに声をかける。左奥へと続く道は賀茂神社の参道。提灯をかける門柱が見える。祭りのときには灯が燈りにぎわう。
- むらから東方を望む。旧家の立ち並ぶ街並みと見下ろす安曇野が美しい。
- 長野県内には3社しかないという歴史の深い賀茂神社。境内には舞台の蔵も。
- 店先に吊るされた鱈の燻製。何でもつくる店主の自家製のひとつ。時季の商品が季節を感じさせる。

平林祐介（ひらばやし・ゆうすけ）



都市デザイン学習会、景観講座の頃から参加し松本のまちなみを様々な視点で見ている。

学生時代は京都二寧坂で景観保全の地区計画策定に関わるなど、社会学の視点から、まちなみや景観と暮らしや生活様式の関係性について研究していた。景観はコモンズ財であるという考え方から、コミュニティで保全・活用することの重要性を感じている。

「松本看板学講座」の歩み

◆ 看板学講座誕生までの背景 ◆

- 2013 平成25年度 景観講座「景観から地域づくりを考える」
- 2014 平成26年度 景観講座「景観から地域づくりを考える2」
- 2015 平成27年度 景観講座「過ごしやすいオープンスペースを考える」

◆ 裏町看板学講座から裏町看板学会発足 ◆

- 2016 平成28年度 景観講座「裏町看板学講座 #1」
(松本市東部公民館にて全4回/11~12月)

28年度の松本市景観講座では下横田町等、通称「裏町」に焦点を当てての開催となった。多くの人が親しみやすく参加しやすい企画として、裏町に目立つ看板を手がかりにしようかと話し合われ、看板学講座が誕生、さらにこの講座から「裏町看板学会」が、発足した。



↑看板が並ぶ裏町の通り。

講座は全4回。裏町をよく知る先達のお話を伺い、昼と夜の裏町を歩き、写真撮影。それら多数の取材写真を共有してのワークショップでは、「店主からの発信＝看板」を見る側はどう受け止めるのか、分類を試み、考察した。最終回では「看板文学」と銘打ち、参加者が「看板の気持ちになって語る」発表を行なった。長文物語、俳句、クイズ形式等、参加者、スタッフ全員による多彩なパフォーマンスとなった。



↑講座#1 募集チラシ



↑看板文学大賞は、長編「どぜうって、なに〜？」に決定。裏町育ちの作者は、この看板の独白で、裏町の今昔を生き生きと語ってくれた。



↑とても真面目な雰囲気参加者が、パーの看板を題材に語る。「ねえ、ちょっと〜♡」オネエ言葉による熱演は、喝采を浴びた。

- 2017 平成29年度 景観講座「裏町看板学講座 #2」
(松本市東部公民館にて全4回/11~12月)

昨年度の裏町とそれに対応する表側の東町、両者を巡ることにより「ウラとオモテ」を改めて考え、さらに、グループワークで未来の裏町と東町の姿を自由に「妄想」した。



↑江戸時代には善光寺街道として栄えた東町通り。現在は車道中心で歩き辛い。



↑ノレンなどの和の風情の復活、歩いて楽しめる通りや水辺等、未来を妄想。



↑講座#2 募集チラシ



↑かつての裏町の趣を伝える看板は、取り壊されがちだが、この看板は学会員が保管中。

- 2017 平成29年度 景観講座番外編「鯛萬の井戸案内看板」設計ワークショップ
本誌 p.24~25 参照
- 2018 平成30年3月17~18日日本サイン学会第11回デザインフォーラム 松本市で開催。
都市計画家・倉澤聡氏の研究発表の中で裏町看板学会の活動紹介。
全国のサイン学会員との交流、松本市街の看板探訪。
日本サイン学会会長武山良三先生より「signs」連載のご提案を頂く。
2018年以降、裏町看板学会員が持ち回りで「看板物語」を綴る。
本誌 p.5 参照



◆ 松本看板学会に名称変更・松本看板学会発足 ◆

- 2018 平成30年度「鯛萬の井戸のサイン」松本市景観賞公共施設部門賞受賞
- 2018 平成30年度 景観講座「松本看板学講座 #3」
テーマ・看板の健康を考える (中央公民館・大手公民館にて全3回/10~11月)

- [1: 看板リテラシー]
- [2: 看板保健学]
- [3: 世界健康看板会議]

「看板健康診断書」のフォーマットを作成。
中町・本町・駅前を歩き、街中の看板たちの顔色で、健康チェック。



↑診断例「冷感性」が心配。



↑オリジナル看板健康診断書

- 2019 令和1年度 景観講座「松本看板学講座 #4」
テーマ・看板地理学 (Mウイングにて全4回/11~12月)

- [1: 看板巡検]
- [2: 看板界隈学]
- [3: 看板界隈性診断実習]
- [4: 看板界隈妄想実習]

広義の看板、狭義の看板について考え、地区を「巡検」。看板をきっかけに地区の特性を読み解き、共有し、未来を大きく妄想した。



グループワークで松本駅周辺の未来を妄想。↑「松本駅」の看板や彫刻、借景の山も活かす。



↑松本看板学講座#4 チラシ部分

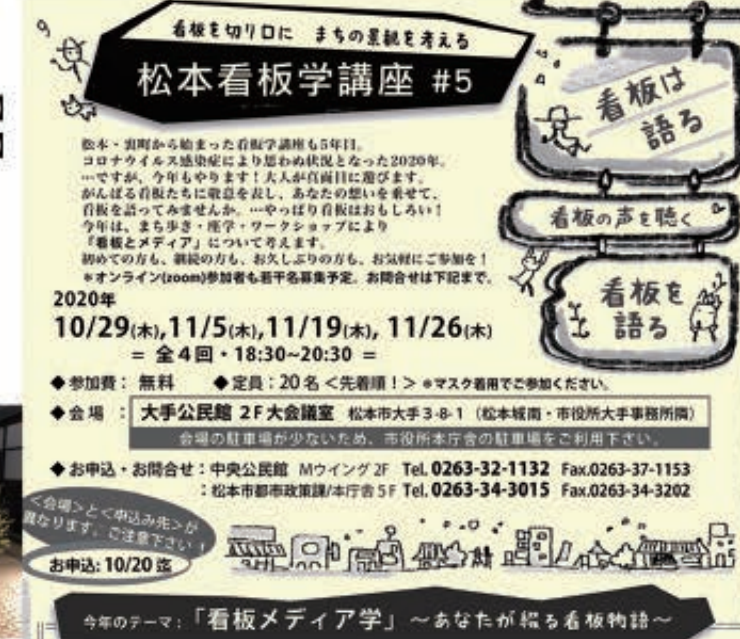
- 2020 令和2年度 景観講座「松本看板学講座 #5」 (大手公民館にて全4回/10~11月)

＜テーマ・看板メディア学＞

～あなたが綴る看板物語～

- [1: 看板メディア学基礎]
- [2: 看板メディア学実習：ロケハン]
- [3: 看板看板メディア学：編集会議]
- [4: 看板メディア学：学会発表]

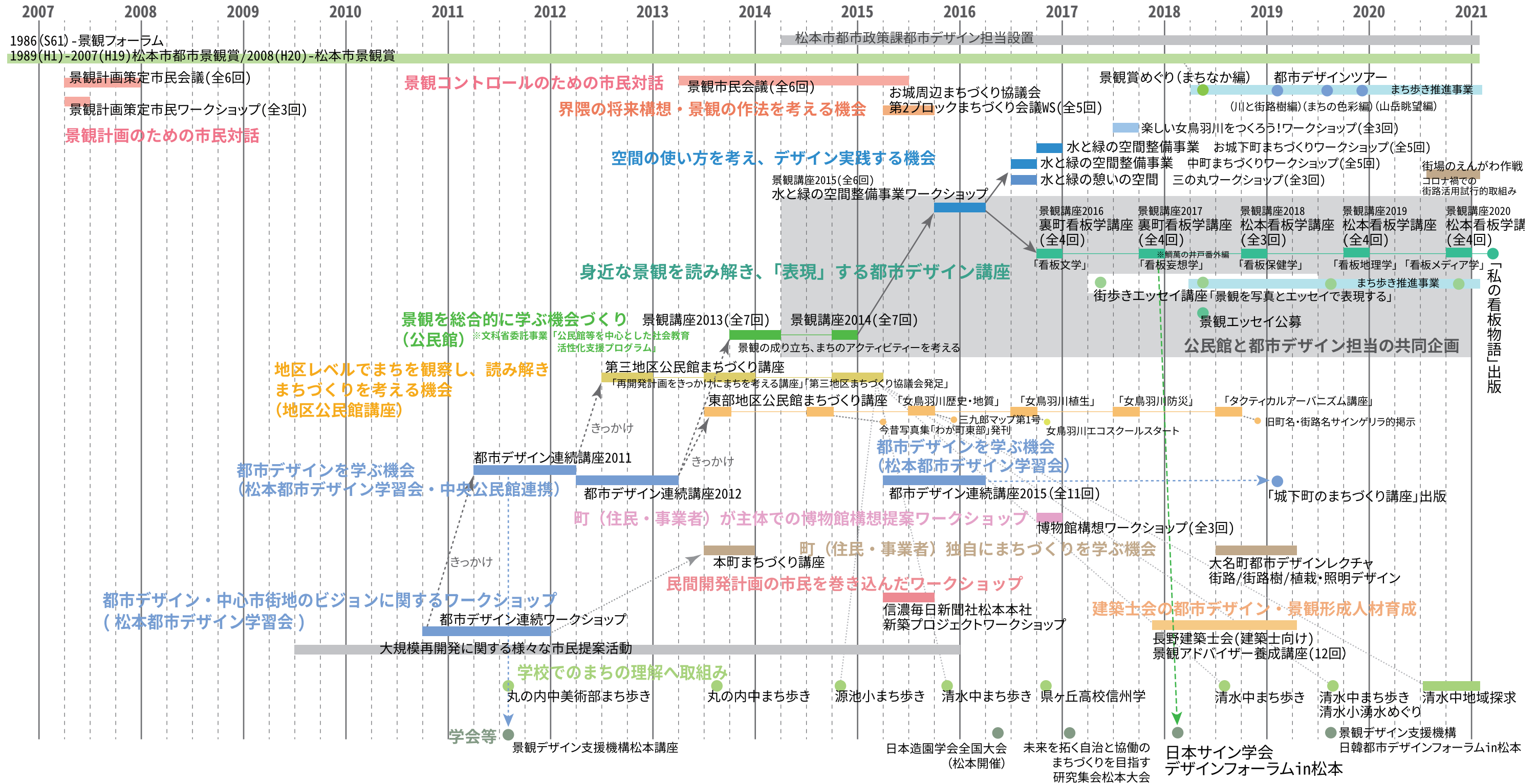
コロナウイルス感染防止のため、一部の方はオンラインでの参加。個人作業、オンライン作業を試み、signsのご許可を頂き、「看板物語」と同じレイアウトで「私の看板物語」を作成。本誌作成につながった。



今年のテーマ：「看板メディア学」～あなたが綴る看板物語～

松本の都市デザイン・景観を考える講座・ワークショップ等 一覧

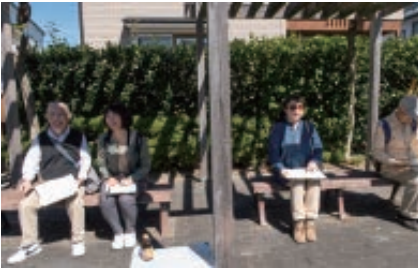
松本では都市デザインに関する学びや考える機会があるので、派生的な活動が広がってきました。まちを共に学び、共に考える場や機会をつくることで、色々な立場の人たちが集まり、新しいアイデアも生まれ、新たな展開が生まれる。まちを地に足をつけて考えるなかで、看板学講座のようなまちを深く読み解き、遊び心もあるような講座も生まれてきました。



景観講座と空間整備の連携

平成 23(2011) 年、平成 24 年に松本都市デザイン学習会と松本市中央公民館の協働による都市デザイン連続講座が行われ、公民館でも都市デザインや景観を学ぶ機会をつくる重要性が認識されていきました。このような背景のなか、平成 25（2013）年、松本市中央公民館の文科省委託事業「公民館等を中心とした社会教育活性化支援プログラム」をきっかけに景観講座ははじまりました。1 年目と 2 年目は「景観から地域づくりを考える」をテーマに、景観の成り立つ背景や町並みの景観寿命に対する考察、ヤン・ゲール著「人間の街」も参考にして人のアクティビティーと景観の関係性について学ぶ講座を行いました。

3 年目の平成 27 年度の景観講座では松本市都市政策課都市デザイン担当の事業「水と緑の空間整備事業」と連携し「過ごしやすいオープンスペースを考える」をテーマに、屋外のオープンスペースで人が過ごす場を実際に観察ながら魅力的な憩いの場に対する考察を深めました。実際の空間整備に繋がる実践的な講座となり、「人が楽しく憩う姿が見られる風景こそまちの大きな看板である」ことを共有し、講座のアイデアをもとにいくつかのポケットパークや小公園の整備が進められました。平成 28 年からは景観講座から独立して水と緑の空間整備事業としてワークショップが 3 地区で行われ、そこでの観察や提案がオープンスペース改修に生かされています。



講座で、実際にオープンスペースの居心地や座りやすさを確かめながら・・・

伊織霊水前小公園



ちょっと暗い雰囲気があり、植栽柵には雑草が増えてしまっていた以前の伊織霊水前小公園の様子



改修工事ではワークショップも。子どもたちが好きな石を持ってきて埋めて、洗い出し仕上げの体験



植栽で空間に囲われ感を出汁、水場をつくって子どもが遊べるように。正方形の大きなベンチを設置してお茶やお弁当を広げてくつろぐこともできるように。



中町東緑地



以前は自転車置き場と化していた中町東緑地は、地図の位置や植栽を工夫したことで、中町散策をする人が休憩する場になり、以前は全く見る人がいなかった地図も頻繁に使われるようになった。

下町会館前広場



中町蔵の会館前広場



上土下町会館前の東門の井戸まわりのスペースは、ごちゃごちゃして混乱した空間になっていたので、地図の配置や植栽を改修、植栽の夜間照明にも工夫を施した。以前より居心地の良さが増し、地図を使う人も増えた。



中町蔵シック会館の前庭は人通りが多いが、休んだり座ったりする人は以前は少なかった。井戸まわりに水盤をつくり、植栽をデザインしなおすことで憩う人が増加した。



ナワテ通り四柱神社前



石組みされ、水路を引いて流していたナワテ四柱神社前水場の以前の様子。飲用不可の水を誤って飲む人もいたため井戸を掘り、河原の見晴らしを遮っていた岩を取り除いた。込み入っていた植栽もスッキリと。



松本看板学会コメンテーター高田さんが「なわて若がえりの水」の看板をデザイン。



鯛萬の井戸看板は東部公民館まちづくり講座と看板学講座の連携で生まれた。詳しくは、24 ページ「町会長は彫金師」を参照

『私の看板物語』に寄せて

店は大きな経費と労力をかけてつくられる。主にとって店は日々の暮らしを支える仕事場であり、夢を実現する場所でもある。それだけに店名は我が子に名付けるように頭をひねって付けられ、店名を標した看板は主の分身となって客を迎え・見送る。看板には、店主の哲学や感性が 100% 反映されるからこそ、そこに人が感じられる。

地方都市では生活の中心が郊外に移り、幹線道路沿いには大型店が並ぶ。その多くは全国展開するフランチャイズチェーンで、どうしても画一的で人の気配を感じ取りにくい。かといって駅前旧市街はシャッター街となり、人の姿を探すことさえ難しい。

そんな状況の中で、松本を訪れると個性的な店と看板に出会えるので嬉しくなる。2018 年に日本サイン学会を開催した時に街中の看板調査をしたが、駅〜松本城〜あがたの森公園と歩いて回れるコンパクトなエリアに多数の秀作看板があり大興奮した。その集積度合と質の高さは全国的に見ても群を抜いている。思わず「これは奇跡か?！」と思ったほどだ。

看板の設置場所を示した地図と写真を合わせた「図鑑」をつくり松本の魅力を伝えたいと思い立ったが、知れば知るほど、そこに人やまちの歴史が凝縮されていることがわかった。そこで「物語」としてまとめるべきだと思い当たった。この企画に賛同してくれたのが松本でユニークな活動を行っていた裏町看板学会。同年 9 月発行のサインデザイン専門誌『signs』12 号から会員によるリレー形式で「看板物語」の連載が始まった。

景観は人を育て、育った人がまた次の景観をつくる。今回の『私の看板物語』に多くの賛同者が集まったことは、日常に優れた看板が存在していた松本なればこそだと思える。今回の出版によって看板並びに個性豊かな店の魅力が再認識されたら嬉しい限りだ。松本にはこれからもずっと人が感じられる稀有なまちであり続けて貰いたい。

武山 良三 / 日本サイン学会会長・signs 編集長

35 年ほど前から都市サインを中心にサイン計画を行うなか公益社団法人日本サインデザイン協会入会後は、屋外広告物としての店舗看板に関心を持ち活動してきました。長年、松本に通い景観を観察してきましたが、2018 年に日本サイン学会のデザインフォーラムが松本で開催され、それ以来松本の店舗看板にも興味を持つてきました。

一般的に良い店舗サインとは都市景観に影響が無いように、大きさ、色彩の使い方など周辺との調和を考えることが求められます。ただし店舗サインや看板の本来の目的は、お店の特徴などを伝えることと店主の考えや思いを伝えることです。

松本における店舗看板には、この店主のこだわりをいろいろと感ずることが出来ます。今回の「私の看板物語」を読むと、店主の関係する職人、書家、家族へのこだわりや、城下町という歴史的な地域の特徴に対するこだわり、松本の伝統工芸へのこだわりなどがいろいろな形で看板に反映していることがわかります。店主の看板に対する思い入れやお店に対する考え、地域の文化、看板と関連した生活などが語られ、看板の背景にある物語性が強く感じられます。単に見るだけでは知ることのできない看板にまつわる物語が楽しく、とても興味深く感じました。

今回、これら松本の看板を主体とした「私の看板物語」が出版されると伺い、それぞれの看板に込められた、歴代オーナーの思い、伝統工芸を駆使した製作者の思い、個々の看板にまつわるエピソードなどが収録されることは、看板そのものにまつわる人の心と時を刻んだ生活文化などが物語として伝わり、今までに無い看板文化の貴重な記録になると期待しています。これによって表面的な見た目だけが主体となってきた看板が、その内面に込められたオーナーの思いや看板にまつわる物語が共有されることで、看板本来の在り方を考えるとともに、新たな視点で看板文化を読み解くこともできる楽しい読み物の一つとなることでしょう。

宮沢 功 / 公益社団法人日本サインデザイン協会理事

平成 27 年に松本市を訪問して以来、松本市の都市デザインの動向、中でも「裏町看板学講座」という魅力的な名前の講座や、日本サイン学会デザインフォーラムの開催など、看板・サインをテーマにした取組みの報には注目していましたが、このたび講座の活動をまとめられたとのこと、参加者をはじめとする関係者の皆さんに敬意を表します。

看板、行政的に言うところの屋外広告物は、とにかく景観を阻害するものとしてとらえられがちですが、一方で魅力的な看板もあります。私がいた横浜市では、平成 25 年度から「横浜サイン」として、事業者や市民の関心を高めて魅力ある景観をつくる広告物を増やすための取り組みを始めました。専門家によるフォーラム、魅力的な看板を紹介するパネル展、表彰制度、商店街の看板を見て歩くまちあるきなどです。このうち「まちあるき」は、安全点検・維持管理の注意喚起を兼ねており、関係者の関心を取り戻す重要な取り組みとなっています。また、これらの活動は看板の業界団体とも連携し、官民協働で取り組んでいます。

さて、看板を景観要素として見ると形や色・大きさなどデザインが着目されますが、目に見えない部分も大事であり、設置にあたっての多岐にわたる関係者（店主、オーナー、看板業者ら）の思いから設置後の維持管理まで、そこに魅力もあり、課題もあると言えるでしょう。特に個性的で魅力的な看板は、店主の人の柄や思いを象徴して店のたたずまいを印象付けます。

ここに描かれているのは、看板の物語であり店の物語です。市民と行政が一緒になり、気になる看板から物語を掘り起こした貴重な取り組みです。看板を切り口に店を知り街を好きになる、松本看板学のこのような動きが各地に広がることを期待したいと思います。

飯島 悦郎 / 元横浜市職員（元都市整備局景観調整課長）



看板学講座では、学会長の提唱する「ワル乗りのインプット、ムチャ振りのアウトプット」で毎回おもしろい課題を企画しています。企画会議の時はノリノリですが、講座当日、主催者側の私も参加者の皆さんと一緒にワル乗り・ムチャ振りな課題に立ち向かうことになる、私は誰よりもヒューヒュー言っている気がします……。今回の企画は取材から写真撮影、執筆、レイアウトまでを自分で行うというもので、慣れない作業が多く、大変なものでした。しかし、これを成し遂げた時の達成感はとても大きく、同じく頑張った他の参加者の作品を聞く発表会では、取材や制作の苦労話も聞けてとても楽しいひとときでした。それぞれが取材を行ったことによって、他では知り得ない素敵なエピソードに出会えました。看板には、看板主の思いが込められており、深掘りすればするほどおもしろい、ということが実感できる講座になったと感じています。

この講座にご参加いただいた皆さま、取材にご協力いただいた皆さま、そして、企画から運営、冊子の準備までご尽力いただいた長谷川学会長、倉澤さん、高田さん。皆様のおかげで、「看板」をきっかけに、温かくて素敵な繋がりができました。ありがとうございました。

天野 由貴 / 生涯学習課・中央公民館

今年度から初めて看板学会に参加させて頂きましたが、まさかこのような立派な冊子ができるとは思いませんでした。これまでの作品に仕上がったのは、学会長をはじめとした学会員の皆様、参加者、取材を受けてくださった皆様のおかげです。本当にありがとうございました。そして最後まで本当にお疲れ様でした。笑

看板は、法律用語で屋外広告物と呼びます。松本市では長野県内でも比較的厳しい基準で広告物の大きさや色彩等を独自の条例で制限しています。私の仕事は、松本市内の広告物が条例で規制する範囲内に納まっているかを審査することが一日のほとんどを占めているのですが、気がついたら休みの日でも看板を見るたびに「あの広告物は派手すぎだけど本当に基準内に納まっているのか」とか「この広告物は大きすぎないか」などと、いつしか批判的な視点からしか見るができなくなってしまいました。そんな中、今年度の看板学講座では看板の良い所を参加者と共有する課題だったことから、いつもと違う視点で看板を見ることができ、ポジティブな目線で看板と向き合う貴重な機会でした。派手な色彩で大きく表示することなく、見る人に強い印象を与えられる魅力的な広告物が身近にたくさんあることに気づくことができました。冊子を通してそんな魅力的な看板がさらに増えることを期待したいと思います。

山田 達也 / 都市政策課都市デザイン担当

編集後記

講座初年度の初回、20 数名の参加者が息をひそめるようにして座っていた。それでも、長谷川学会長が軽やかに「裏町看板学会」を名乗り、路上観察学をお手本とした「なんちゃって学会」と自称したあたりから、和やかな空気が流れた。やや寂れた裏町通りを皆で歩けば、先輩方は「昔はオレもモテたんだよ」と自慢話。若者たちは「うわ〜なにこの看板、笑える〜」と、北風にも負けずにはしゃぐ。みんなシロウト、大量の看板に興奮して、まずは「好き」「苦手」くらいの感想を述べつつ看板に近づいていった。

5 年を経た今回は、取材してオンラインで仕上げ、なんと冊子までできる。初参加の方は戸惑われただろう。5 年継続のベテランでも「今回はキツイねえ」と、目を吊り上げた。そりゃそう。先行き不安な世の中で、投資話でもなく、ポイントが貯まる訳でもない、目先の利益とは無縁。なぜこんなに力と時間を注がねばならぬのだ。お店の戸を開け、店主さんに声をかけお話を聞くには、ちょっとした、いやかなりの勇気が要る。しかし、やり遂げた多くの人へ、「できないかと思ったけどよかったあ。他のお店も行きたい!」と声を弾ませている。冷や汗と嬉し涙の結晶である本誌。皆さんすごい。励ましの言葉を寄せて下さった先生方にも大変恐縮、感謝。この冊子は、先生方との出会い無くしては成立し得なかった。もっと精進せねば。

だがしかし、我ら松本看板学会は誓う。これからも決して大真面目になり過ぎないことを。決して上から目線で看板を評価ばかりしないことを。あの、裏町をはしゃいで歩いた初心を忘れず、「この看板好き〜」と、可愛い看板たちに手を振る心も決して忘れないことを。

倉澤さんと長谷川さんのユーモアも交えた力強い先導で、濃い看板の世界を、肩の力を抜いて楽しんでいけたらと思う。初めての方、久々の方、どうぞ一緒に。そして、看板を掲げるお店の方たちが元気でありますように。

新型コロナウイルスの影響を受けて日々の生活が大きく様変わりした一年でしたが、中でも新たな手法を模索しつつ、松本看板学会主宰の 5 回目の看板学講座を無事に終えることができました。看板学講座は、都市政策課のまち歩き推進事業というソフト事業のひとつに位置付けられており「看板を切り口にまちの景観を考える」というテーマを持って開催してきました。その他にも、市民や来街者がまちを知り考える機会の創出を目的として、各種の専門家等の講師とまち歩きをする“都市デザインツアー”や多くの人と共有したい松本の魅力ある景観について写真とエッセイで綴る“景観フォトエッセイ”などと併せて、まちの景観について様々な視点から楽しめる都市デザインの啓蒙のひとつとして取り組んできました。これらの取り組みを通じて、行政の施策だけでなく市民や専門家等と協働し、松本の魅力的な空間やアクティビティを発見したり生み出したりしながら、将来の魅力的な都市・松本を創造していくことが出来ればと思います。

今まで当たり前だった価値観を一瞬で覆されてしまうような、否が応でも変化せざるをえない新たな時代の転換期に立ち会い、魅力的で持続可能な都市空間の創造の為に都市デザインという手法の大切さに改めて気付くことが出来ました。

小林 湾 / 都市政策課都市デザイン担当

今回の講座では、インターネットを活用したことが印象に残っています。コロナ禍で人が集まるのはちょっと・・・という方のために、zoom でも参加できるようにしました。集まる回と zoom にする回に分けるなど、今後の講座を行う上で新たな可能性を探る良い機会にもなったと思います。最初は手間取っていた zoom の機材の準備も、最後の方にはテキパキとできるようになりました！笑

また、「私の看板物語」の執筆・レイアウトには Google スライドを使用しました。Web 上で共有できるので、講師の方々が全員の執筆状況をいつでも確認でき、質問やアドバイスも書きやすく、しかも同時作業も可能です。メールのやり取りをしなくて良いのが利点ですが、パソコンに不慣れな参加者の方への対応には反省もありました。これからたくさんさんの参加者が集まってくださるよう、便利な機能も積極的に使用して、参加しやすい講座を目指していきたいと思います。

この冊子はテーマとしては珍しい「看板」という題材から紡ぎ出されるたくさんエピソード、ご主人の人となりや看板に込めた思いが書かれており、たいへん読み応えのあるものに仕上がりました。多くの方にこの冊子を読んでいただき、このまちや看板をさらに好きになっていただければ素敵だと思います！

鳥羽 水美 / 都市政策課都市デザイン担当



看板学講座の発端、それは 2013 年から始まった景観講座の次への一手をどうするかという悩みが一つ。もう一つは、中心部のまちづくりワークショップや講座などが盛んになる中で、当時の松本市の都市デザイン担当がそろそろ裏町あたりのまちづくりを考える機会を作りたいけどどうしたらいいだろうかという問いの投げかけであった。

裏町は花街として発展した町である。その後、繁華街として隆盛を極めたのち社会情勢の変化により次第に廃れ、空き店舗が多くなって 10 年以上経過していた。その町の未来を講座で考えようとしても一筋縄には行かないし、考えただけで終わってしまう絵に描いた餅のようになってしまうことは明白であった。町の未来を想像するためにも、ここは基本に返り、現状をしっかりと見つけ歴史を掘り下げる、その基本が大事だという想いから今を見つめるとすると ... 営業している飲み屋さんの数は激減したが、まだ看板ならたくさん残っているではないか！

看板という屋外広告物行政的にいいものをつくるというより、ダメなものを抑えることにどうしても手間暇が掛かるイメージを持たれることが多かったと思うが、都市の文化としての看板、景観として看板が持つ魅力や重要性を紐解いていく。看板を観察するのは面白いし、逆にそこから都市デザインも考えたら面白いんじゃないか、実務上でもこれなら講座が成り立つんじゃないかと 2016 年は看板をテーマにしてみようと話がまとまっていたのである。

また、講座はレクチャというより、都市や町、景観を観察し、読み解き、表現する機会となることを望んでいたのもあり、看板学の 1 年目は「看板文学」と題して、好きな看板を講座受講生の方々に選んでいただき、その看板の気持ちになって一人芝居をする「看板擬人法」により看板を表現していただく試みを行った。これが期待を上まわり、講座参加者の皆さんが看板になりきって表現豊かに演じていただけたのもあって、長谷川学会長の言葉「悪乗りのインプット、無茶ぶりのアウトプット」が定例となり、それから 4 年後の今回、参加者のみなさんに講座の課題として記事を書いてもらうという無茶ぶりに流れ着いたのである。

ここまでたどり着くには、日本サイン学会のデザインフォーラム in 松本を開催していただいたことや、日本屋外広告業団体連合会が発行する『signs』に看板物語として松本の看板を連載させていただく機会を与えていただいたことが大きなきっかけとなった。私も『signs』15 号の看板物語を執筆させていただいて、まちの魅力を伝えるためにも、魅力を生み出す方々の想いを広げるためにも看板物語はもっと広げていく必要があるなど、都市の文化を表現する大きなプラットフォームになるなど気づき、松本看板学会のメンバーと何とかしたいとの想いを共有してしまったのだ。なお、「私の看板物語」の各記事の構成は、『signs』の「看板物語」の構成をほとんどそのまま利用させていただいた。この「私の看板物語」の生みの親は、『signs』の「看板物語」である。

講座の受講生のみなさまにはかなりの負担とは思いつつ、看板学講座の受講生のみなさんなら面白くなるだろうとの信頼もあり、講座の課題に対して期待以上にみなさんが応えてくださった。書き終えた方々からは「大変だった！」とのお言葉をいただきつつも、面白かった、書いて良かったとの感想をいただくことも多く、やはり都市、まちを文化として表現する機会をつくることは、これからの都市デザインにとってますます重要なんだなと実感する機会となった。

「悪乗りのインプット、無茶ぶりのアウトプット」を支えて下さった松本市の講座運営メンバーのみなさん、長谷川学会長や講座の企画検討に関わりいつも素敵な講座のチラシつくってくれる高田美果さんをはじめ本冊子印刷が決まってから編集・校正・デザインなど怒涛の短期集中作業に奔走してくれた松本看板学会の仲間、いつも応援し見守ってくださり無茶ぶりにも関わらず松本の看板学講座や都市デザインに対してメッセージを下された日本サイン学会、日本サインデザイン協会の武山さん、宮沢さん、都市デザインや景観、屋外広告物行政に関わってきた横浜市元職員の飯島さんをはじめ、松本の都市デザインを応援してくださっている全国・世界のみなさま、そして講座受講生の方々、取材に応じて下さった関係者のみなさまにこの場を借りて厚く御礼を申し上げたいと思います。

これからいろいろな場所で、いろいろな切り口で「みなさんの看板物語」が深化し面白く広がることで、心が豊かになる都市の空間や活動が育つことを期待し、あとがきとさせていただきます。

松本看板学講座コーディネーター / 都市計画家 倉澤 聡

松本市中央公民館 / 松本市都市政策課都市デザイン担当主催 令和 2 年度 松本看板学講座「看板メディア学」
令和 2 年 10 月 29 日 / 11 月 5 日 / 19 日 / 26 日 全 4 回開催
※この冊子は令和 2 年度の看板学講座の課題として参加者のみなさんが作成した記事紙面をもとに、印刷にあたって再度編集、レイアウトを行ったものです。

『私の看板物語』松本看板学講座 2020 講座版
発行：松本市中央公民館
発行日：令和 3 年 3 月 31 日
編集・デザイン統括：松本看板学会
協力：signs（発行：一般社団法人日本屋外広告業団体連合会 編集：公益社団法人日本サインデザイン協会 / 日本サイン学会）

© 松本看板学会
本誌掲載記事の無断転載および複写を禁じます





KNBN987-6-543-210987-6
C0000 ¥0000E



定価(¥0,000+税)
松本看板学会出版局

